

令和 7 年度

第 76 回 北日本図書館大会秋田大会

第 49 回 秋 田 県 図 書 館 大 会

記 録 集

大会テーマ

「多様化する時代の図書館
－地域を支えるサービスとは－」

期 日 令和 7 年 6 月 18 日(水)

会 場 秋田市にぎわい交流館 A U

主 催

北日本図書館連盟

秋田県教育委員会

秋田県図書館協会

目 次

■開催要項	1
■開会式	3
■表彰式	5
■基調講演	8
「地域を支える図書館サービスを考える」	
講師 伊東 直登 氏	
(前松本大学図書館長・元塩尻市立図書館長)	
■事例発表	
事例発表①	21
「生涯学習館A o - n aオープンに伴う図書館サービスについて」	
秋田県・横手市立横手図書館 館長 高橋 秀明 氏	
事例発表②	25
「図書館で復興・防災を学ぶ	
～震災・防災学び合いスペース「I -ルーム」を拠点として～」	
岩手県立図書館 館長 森本 晋也 氏	
事例発表③	30
「名取市図書館・学校図書館支援センターの取組み」	
宮城県・名取市図書館 司書 古瀬 さおり 氏	
■意見交換	34
■閉会式	42
■配布資料	

【大会の様子】



開会式



表彰式



基調講演



基調講演





事例発表①



事例発表②



事例発表③



意見交換



意見交換



閉会式

■開催要項

大会テーマ

「多様化する時代の図書館 –地域を支えるサービスとは–」

1 趣 旨

様々なコンセプトを掲げた新たな図書館が生まれ、利用者のニーズも多様化している現在、それぞれの図書館が、限られたリソースで地域住民にどのようなサービスを行っていくか、考えなければならない時代になっている。

社会の変化に対応しつつ、地域の資源を活用した取り組みを行っている図書館の事例を通し、参加者が「自館に必要なものは何か」を考える機会としたい。

2 期 日 令和7年6月18日（水）

3 会 場 にぎわい交流館A U 3階 多目的ホール
〒010-0001 秋田市中通1丁目4-1

4 主 催 北日本図書館連盟 秋田県教育委員会 秋田県図書館協会

5 主 管 秋田県立図書館

6 後 援 公益社団法人日本図書館協会

7 参加者 公立図書館・公民館図書室・学校図書館・大学図書館・専門図書館・
市町村教育委員会等の職員、図書館協議会委員、図書館ボランティア

8 日 程

9:30	10:00	11:00	12:00	12:30	13:00	14:30	14:40	16:20	16:30
北日本図書館連盟			受付	開 会 式	基 調 講 演	休 憩	事 例 発 表	意 見 交 換	閉 会 式
監 事 会	理 事 会	総 会							

9 大会内容

(1)開 会 式 (12:30～12:40)

(2)北日本図書館連盟功労者表彰 (12:40～13:00)

(3)基調講演 (13:00～14:30)

「地域を支える図書館サービスを考える」

講 師 伊東 直登 氏

(前松本大学図書館長・元塩尻市立図書館長)

(4)事例発表・意見交換 (14:40～16:20)

①「生涯学習館A o - n a オープンに伴う図書館サービスについて」

秋田県・横手市立横手図書館 館長 高橋 秀明 氏

②「図書館で復興・防災を学ぶ

～震災・防災学び合いスペース「I-ルーム」を拠点として～」

岩手県立図書館 館長 森本 晋也 氏

③「名取市図書館・学校図書館支援センターの取組み」

宮城県・名取市図書館 司書 古瀬 さおり 氏

意見交換 助言 伊東 直登 氏

意見交換 進行 成田 亮子 (秋田県立図書館 主幹)

(5)閉 会 式 (16:20～16:30)

開会式

主催者あいさつ

北日本図書館連盟 理事長 岸本 亮

皆さん、こんにちは。本年度から、北日本図書館連盟の理事長を仰せつかりました北海道立図書館長の岸本といたします。どうぞよろしくお願いいたします。本日、北海道東北各地から多くの皆様にご参加をいただきまして、第76回北日本図書館大会並びに第49回秋田県図書館大会をこうして盛大に開催できますこと、厚く御礼申し上げます。また後ほど、この席上で、長年にわたり図書館活動にご尽力された功績が認められ、栄えある表彰を受けられます皆様には、心よりお祝いを申し上げます。おめでとうございます。そして本日、ご参加の皆様方におかれましては、日頃よりそれぞれの地域におきまして、様々なお立場で図書館活動に熱心に取り組まれておりますことに心から敬意を表しますとともに、重ねて感謝申し上げます。ありがとうございます。

さて、私たちが大きく関わる読書活動の推進は、急激に変化する時代に必要とされる資質・能力を育む上で、読解力や思考力、表現力等を養うために不可欠のものとされております。このことから現在、国におきましては、社会変化を踏まえた図書館、学校図書館の運営充実の在り方について議論されているところでございます。この議論におきましては、これからの図書館、学校図書館に求められることとして、デジタル社会への対応、多様な人々のための読書環境の整備、そしてこれからの子どもの学びを支える読書環境の充実、これらが挙げられております。その他諸課題として、関係機関等との連携・協働

の促進、今後の図書館・学校図書館に求められる人材育成などが示されておりまして、これらの対応も必要とされているところでございます。

このような議論が行われている他、地域の書店が減少傾向にあることを踏まえまると、図書館の役割はますます大きくなっていると考えられますことから、課題解決をはじめ、求められることについて真摯に向き合い、地域住民のニーズを把握しつつ、私たちが担う役割を果たしていく必要があると考えております。

そんな中、本日は「多様化する時代の図書館」ということをテーマにして、松本大学図書館と長野県塩尻市立図書館の館長を歴任されました、伊東直登様を講師にお迎えしまして、社会の変化に対応しつつ、地域の資源を活用した取組を行っている図書館の事例を通じて、「自館に必要なものは何か」ということを共に考えてまいりたいと思います。本日の大会が、参加された皆様にとって実り多いものとなって、講演や事例発表等で得た知見や成果を、明日からの図書館の運営や活動に生かしていただければと思っております。

結びになりますが、お忙しい中、講師をお引き受けいただきました皆様方、大会の開催にあたりご尽力いただきました秋田県教育委員会、秋田県図書館協会はじめ多くの関係各位の皆様方に、心よりの感謝を申し上げます。私からの挨拶といたします。本日はどうぞよろしくお願いいたします。

来賓あいさつ

秋田県教育委員会 教育長 安田 浩幸

秋田県教育庁生涯学習課長の内田と申します。本来であれば安田教育長が出席いたしまして、皆様に直接ご挨拶を申し上げるところでございますが、議会の会期中のため出席ができませんでした。挨拶を預かってまいりましたので、これを代読をさせていただきます。

本日、各県から多くの図書館関係者の皆様にご参加いただき、「第76回北日本図書館大会秋田大会」並びに「第49回秋田県図書館大会」が開催されますことを、心からお喜び申し上げます。また、ご参加の皆様が、日頃から図書館の運営や関連事業を通じて、読書活動の推進や社会教育の振興に尽力されていることに、心から敬意を表します。

さて、少子高齢化・人口減少の加速化や生成AIをはじめとした急速な技術革新等により、社会の変化が激しさを増し、地域住民の抱える課題は多様化・複雑化してきております。そのような中、地域の情報の拠点として図書館に求められる役割は多岐にわたり、その重要性は増していると考えます。

また令和5年3月に策定されました、国の「第五次子どもの読書活動の推進に関する基本的な計画」では、「デジタル社会に対応した読書機会の確保」「多様な子どもたちの読書機会の確保」が基本的方針として掲げられており、図書館における今後の取組の方向性が示唆されていると考えます。

急激に変化する時代に必要とされる資質・能力を育む上で、読解力、思考力、表現力等を養う読書活動の推進は不可欠であります。本県においては、「読書が好き」と答えた児童生徒の割合が全国平均よりも高く、不

読率も全国より低い傾向にあります。3月に策定いたしました、「第4期あきたの教育振興に関する基本計画」に基づき、これからも引き続き、県民が生涯にわたって読書に親しむことができるよう、子どもの発達段階に応じた読書活動を支援するとともに、子どもと関わる大人に向けた読書の楽しさの理解啓発に取り組んでまいります。

本大会は「多様化する時代の図書館—地域を支えるサービスとは—」がテーマとなっております。図書館が、多様化する地域住民のニーズに対応するためにサービス機能の強化を図っていくことは、持続可能な地域コミュニティの基盤形成や、その将来を担う子どもたちの学びと成長を支援することに結びつくものであり、現在の図書館を取り巻く状況に適したテーマであると考えます。皆様には、講演や事例発表等をとおして、各地域の情報を持ち帰られ、今後の図書館の運営や関連事業に生かしていただくことを期待申し上げます。

結びになりましたが、ご参会の皆様のますますのご発展とご活躍を心からお祈り申し上げ、挨拶とさせていただきます。本日は誠にありがとうございます。

表彰式

北日本図書館連盟功労者表彰

1 図書館事業功労者

道 県	被表彰者	功 績
北海道	よ き 読み聞かせサークル おはなしのき木	平成6年に読み聞かせ活動を希望する母親が集まり結成。中標津町図書館（隔週）のほか、町内学校（月数回）・幼稚園・保育園・高齢者サロン（随時・不定期）での読み聞かせ活動を行っている。
北海道	むらやま こういち 村山 功一	平成21年5月から図書講座「平家物語読書会」を開講し、「全訳注平家物語」全巻を読破。令和4年6月からは「平家物語を読む会 Part 2」を開講した。 京極町読書感想文コンクールの審査員を10年間務めたほか、湧学館において図書ボランティア活動を行うなど、京極町の読書推進に大きく貢献した。
宮城県	おはなしキラキラの会 ^{かい}	平成13年に結成してから、名取市図書館でのおはなし会（絵本の読み聞かせ、紙芝居、パネルシアター等）を通して、子どもたちに本の楽しさを知ってもらい、読書へのきっかけを作っている。
秋田県	お の すずこ 小野 鈴子	平成27年に八郎潟町立図書館が新館開館して以来、書架整理ボランティアとして図書館の環境美化に貢献している。 令和元年7月には、自らが発起人となり音読会サークル「かたりなハッチ」を設立、小学校へ出向いての読み聞かせも行い、子どもたちにも好評である。

道 県	被表彰者	功 績
山形県	おの でら ひめ 小野寺 姫	<p>平成１７年から１９年間、庄内町の図書館協議会委員として尽力。特に、庄内町立図書館整備事業については、図書館協議会委員長として、基本計画作成等に多大なる貢献を果たした。</p> <p>おはなしボランティアサークルの活動も行うなど、読書推進への貢献は多岐にわたり、その功績は極めて大きい。</p>

２ 永年勤続者

道 県	被表彰者	功 績
北海道	ふじくら あつお 藤倉 徳夫	<p>平成４年の上士幌町図書館オープン時から司書として着任し、広報、行事の企画運営等、図書館業務全般を通して、当該図書館の礎を築き、その発展に貢献した。</p> <p>図書館が事務局を務めた町民文芸誌編集委員会の事務局員としても活動を支えるなど、28年の長きにわたり、図書館の運営・発展に寄与した功績は大きい。</p>
宮城県	うしだ み さ こ 丑田 美佐子	<p>平成６年度から３１年間の永きにわたり、多賀城市立図書館、仙台市各図書館に勤務。</p> <p>着任以降、図書館業務に従事し利用者サービスの向上に努めたほか、レファレンス業務に熱心に取り組み、仙台市図書館の振興・発展に大いに貢献した。</p>
宮城県	しぎはら あきこ 嶋原 明子	<p>平成７年度から３０年間の永きにわたり、仙台市各図書館に勤務。</p> <p>着任以降、図書館業務に従事し利用者サービスの向上に努めたほか、レファレンス業務に熱心に取り組み、仙台市図書館の振興・発展に大いに貢献した。</p>

道 県	被表彰者	功 績
福島県	すずき しほ 鈴木 史穂	<p>司書としての専門性を活かし、福島県立図書館内での奉仕及び館外での活動を積極的に行い、第一線で質の高い図書館サービスを提供した。</p> <p>令和４年度からは資料情報サービス部長として円滑な図書館運営に尽力するなど、周囲からの信頼性は高く、その功績は誠に顕著である。</p>
福島県	ないとう たけ 内藤 タケ	<p>平成１１年度より通算２０年にわたり、三春町民図書館の運営に貢献し、その間、数多くのレファレンス業務に誠実に励み、利用者の便宜に寄与した。</p> <p>読書推進活動に熱心に取り組んだほか、５年ごとの図書システム更新にあたってもその都度熱心に取り組み、最適化された構成になるよう尽力した。</p> <p>各種の研修会に積極的に参加し、知識や技術の研鑽に努めた。</p>
福島県	なかむら のりこ 中村 典子	<p>会津若松市立会津図書館の職員として、平成１２年から２３年の長きにわたり勤務し、レファレンス業務や一般図書・郷土資料の登録・整理に誠実に取り組んだ。</p> <p>また、地区公民館図書室及び市立学校図書館へ訪問支援を熱心に行い、円滑な図書館運営に大いに尽力した。</p>

「地域を支える図書館サービスを考える」

前松本大学図書館長・元長野県塩尻市立図書館長
伊東 直登

皆さんこんにちは。今、図書館サービスのパイオニアと身に余る紹介をいただきましたでしたが、私は、図書館は「継続」だと思っています。資料の収集にしろ、蓄積にしろ、サービスにしろ、それが継続していないといけない。「誰か」がいた図書館という言い方は、私はあまり好きではないんです。「あの人」がいた図書館とか、「あの人」がやっている図書館とか。私は、伊東がいなくなった後の塩尻市立図書館を尊敬しています。そういう図書館であり続けたい、そういうふうにしろと言ったことは何もないのですけれど、続けていてくれる。ちょっと口はばったいですが、そんな図書館で今もいてくれることに、後を継いだ職員に、感謝と尊敬の念を抱いている者として、今日お話しをさせていただきますと思います。よろしくお願いします。

「地域を支える図書館サービスを考える」というお題をいただきました。あちこちから講演の声がかかりますと、地域とか街づくりということが必ず付いてくるようになりました。どうですか、皆さん。地域や街づくりを意識した仕事になっているでしょうか。今日は、まずそこを考えてみたいです。

そして、そのために図書館は何をしたらいいのか、そのための可能性を秘めてい

るのだろうか、あるとすれば何だろうか、そんなことを考えてみたい。そして何よりも、何をしようか、というところですね。今日は事例発表もあります。そういう中から何か、「これ使える」、みたいな話を1つ2つ持って帰れたらいいと思っています。今日は、図書館サービスに対する「危機感」という言葉を使っています。なんとかしなければという思いです。それがあるのだという前提で話を聞いていただきたいと思います。

ということで、まずは「図書館、必要とされていますか」。ちょっと厳しい言葉です。図書館1年目の方はいらっしゃいますか？ わりといますね。図書館に来て、初めて図書館のことをいろいろと勉強し始めた方もいらっしゃるでしょうし、今まで図書館ユーザーだった方もいらっしゃると思いますが、多くの場合の図書館のイメージは「静かに本を読むところ」です。決して間違いではないです。日本中が多分そう思っています。

これは毎日新聞社が行った世論調査です。「普段どのくらい図書館に行きますか？」好きな人は週に1度は行く。月に1度、数か月に1度、ほとんど行かない。ほとんど行かない人は、住民のどのくらいだと思いますか。週に1度来るなんて、本当のハードユーザーです。月に1度までをハ

ードユーザーと呼んでいいかと思いますが、合わせて14%、住民の10数%と言われています。逆に、ほとんど行かないという人は7割です。住民の7割が来ていないということです。それを認識した上で、図書館サービスをどう考えていきますか、というのが問題です。

もう1つアンケートです。「あなたは、どんな図書館ならもっと利用したいと思いますか」。皆さんいろいろ考えたと思いますけれど、この問題は少し横に寄せます。心の片隅に留めていてください。後でもう1度出します。

読書ということについて、少し考えていきたいと思います。貸出サービス、数字が取りやすいので図書館はこの数字に頼ってしまうのですが、全国民が年間に何冊の本を借りているかというと、日本は1人あたり約5冊です。もうかなり長い間、5冊前後です。頭打ちみたいな状態ではありますし、最近下がりつつある数字です。イギリスなどの欧米には、その倍も3倍も4倍もという国がいくつもあります。という現実を踏まえて、何の話をしているかというと、私が図書館を作る時にぶち当たった壁、それを今共有していただこうと思って話をしています。

少し図書館史の勉強です。戦前は有料の図書館が結構ありました。そして閉架式がほとんどで、貸出しはしない。図書館内で見て、終わったら返却するというのです。これが戦後、GHQの関係でアメリカ型の図書館の考え方が入ってきました。図書館法が1950年に作られ、公立図書館は無料でなければならないということになりました。ここで、やっと日本は近代的公共図書館の姿を整えたことになります。アメリカに公共図書館ができて約100

年後です。無料で、開架式中心で、貸出サービスやレファレンスサービス、児童サービスなどを始めたのが戦後の話。まだ数十年の歴史です。

そして、1963年に「中小レポート」、1970年に「市民の図書館」というバイブルのような本が出版され、貸出サービス、児童サービス、そして全域サービスという3本の柱を図書館はしっかりやっていこうという、皆さんよくご存知の今の図書館の姿ができあがってきた。これを言い始めたこの頃は、先ほど1人あたり貸出冊数5冊と言いましたが、1冊2冊だったわけですから当時の図書館に関わっていた方は、なんとか図書館という文化を住民の皆さんに理解してもらって使ってもらおう、という本当にイチからの出発だったといえると思います。その延長線上に、私たちもいるのは間違いないだろうと思います。

ということで、図書館の数がどんどん増えて、今公立図書館だけで3,300館、貸出も増えました。ひたすら右肩上がりの図書館の歴史がここにあるわけですが、もう1つの結果として生まれてきたのが、読書の館（やかた）、本好きが行くところという言い方です。つまり本を読まない人は図書館に行かない。そして、無料貸本屋問題というのは、図書館歴が長い人でないと知らないかもしれませんが、1990年代、20世紀の最後の時に、本屋の売り上げ冊数を図書館の貸出数が上回りました。その時に、出版界、本屋は生活がかかっていますから、図書館側がなんとか考えろということで、こういう問題がきました。今でも、発行されたら3か月位は貸出ししないでほしい、などの話はよくあります。図書館が歩んだひとつの歴史であるのは間

違いがないです。

私が図書館を作ろうと思った時にぶち当たったのは、ここです。先ほど見たように、日本の図書館は決して世界に誇れるような図書館活動とは言えていなかったはずで、世界が10冊20冊という個人貸出をしているにも関わらず、日本は5冊で四苦八苦しているわけですから。先輩たちが一生懸命築き上げてくれた歴史がそこにあっての5冊です。これって何なんだろう。欧米に全然追いついていないのに、もう批判されて身の置きどころもなくなっているこの状態って何なんだろう。ここで思ったのが、だから5冊なのではないか、ということです。職員は汗をかいて仕事をしているわけですけど、今のやり方に何か問題があるのではないかな。

無料貸本屋問題、バブルがはじけた後で、小さな政府とか言われ始めた頃です。行革で、一律マイナスシーリングで予算を削るとか。最近では、コロナ禍で図書館を閉館しても全然困らないよ、という人たちもいました。そういう中で、図書館って必要なのかという問題と私たちは付き合わないといけない。図書館って必要なのかという声と、私たち図書館人のなんとかしなければという声です。

なぜこんなことを話しているかというと、塩尻市も新図書館を作ろうとした時に、作るか作らないかで市長選をやっています。同じ頃、図書館建設反対派の候補が当選して、建設が白紙になったという自治体をいくつも見えています。塩尻市は幸いやると主張した市長が当選しましたが、人ごとではなかった。ですから当時の私は、その声に向かって、図書館は必要でしょうという話を構築しなければいけなかった。年5冊の図書館でいいのか。いや、良くない

よね。だって7割が来ていない。来ていない人たちが図書館はいらないと思っているのなら、選挙で相手の方が勝ちます。これは何とかしないと本当にダメかもしれない、と思いました。

その危機感と向かい合っていたこの頃、2006年に「これからの図書館像」、2012年に「図書館の設置及び運営上の望ましい基準」が文科省から出ました。菅谷明子さんからニューヨーク公共図書館の報告があって、「ビジネス支援」が紹介されました。私はその頃まだ館長ではなくて、民間のお金儲けを支援する図書館ってよく分からない、分からないけど何か大事なところらしいぞ、みたいなところから当時スタートしています。延々と築き上げてきた読書の館とか無料貸本屋とか言われる図書館ではダメだ、ということです。もちろん、今までの図書館を否定しているのは全くありません。新しい切り口を見つけていこうという動きに他ならない。みんなに使われる、利用される図書館でありたい。

これは、いくつかの選挙がやっぱり影響していたと思いました。作るって言っては、市長が変わるとコロッと変わってしまうみたいなこと。先ほど言ったように、図書館は継続が大事です。図書館は大事と言っている市長の時には予算がついて、その年の資料はきちんと集まっているのに、図書館はどうでもいいという人になったら資料費が半分になって、ここの4年間だけ資料がないというのは、20年30年後の人たちが見たらコレクションとしておかしい。図書館はきちんと継続していなければいけない、みんなに利用される図書館になっていかないといけない。

その時に出てきたのが、「課題解決型図

書館」という言葉です。この言葉は、この場では使えますが、市民向けには使えないと思っていますので、「地域に役立つ図書館」、どこの図書館でもサービス計画の目標等にこのような言葉を使っていると思います。要するに「みんなの図書館」です。一部の人、本好きの人の為だけではなく。本好きなことはいいことなんですけどね。私も本大好きですから、それを否定するわけではないです。

ただ、本好きの本のイメージは小説なんです。図書館の読書ってそうではないのでは、というところへ頭を切り替えていった方がいい、というのが課題解決型図書館という言葉になってきた。そして課題解決の課題先はどこかという、市立図書館なら市民です。市民のいるところは「地域」であって、「図書館利用者」ではない。市民の役に立つ図書館でありたいという少し大きな話へ、この時、21世紀に入ってから図書館は政策的に舵を切っている、ということをしきんと押さえておきたい。今回お題にいただいた、「地域」というところへ繋がってきます。

「これからの図書館像～地域を支える情報拠点を目指して～」。お手元の資料を後で見てください。これからの図書館サービスに求められる新たな視点、ということで課題解決支援機能の充実をうたっています。これからの図書館には住民の読書を支援するだけでなく、地域の課題解決に向けた取組に必要な資料や情報を提供する、という始まりで書かれています。後で私、このフレーズを否定します。

「図書館の設置及び運営上の望ましい基準」の方も3の図書館サービス、1が貸出サービスと2が情報サービスで、普通ここまでです。大学で教えているのもこの2

つですけれど、3番目に地域の課題に対応したサービスということで、就職・転職、起業、職業能力開発、日常の仕事と子育て、教育、自立支援、健康・医療、福祉。既に図書館にある資料です。今まで小説ばかり買い揃えてきた傾向がありますから、新しい資料も必要ですけれどね。

続いて、公共図書館の特性。公共施設として最多利用、これはもう昔から論文等で書かれています、市役所の窓口、体育館、美術館、博物館、どこも敵わないです。圧倒的に図書館が多いです。いつでも誰でも使える。敷居は低いはずなんです、先ほど、事例発表の先生と話していたら、来ていない人にとっては敷居が高いと言われてしまった、という話がありました。そうなのでしょうね。役所ですからね。

そして、特化しない情報提供機関。専門化されて「何々に詳しい図書館」になってはいけません。あらゆる情報を貯めていて、どんなことでも一定の回答ができるという資料コレクションがなければならない。そのために図書館の予算があるはず。

そして問題や課題の複合性に対応できる図書館。ある課題を言うと、それに関係する多分野の情報にすぐ繋がれるのが図書館です。カフェを作りたい時に何の本を読んだらいいか。カフェを作った経験談もいいでしょう。それはエッセイにあるかもしれません。その他に、コーヒーの美味しい入れ方、サンドイッチの美味しい作り方、人を雇用するかどうか、ユニフォームをどうするか、何より場所をどうするか、図書館に相談すれば何らかの回答を出せる資料がたくさんある、というのがこの複合性です。

企業診断士さんたちは、経営問題には強いけれど、働く人の服装については全く分

からない、みたいなこともあり得ます。そこを図書館は埋められるということです。そういう特性を持ちながら図書館はどうしていったらいいのか、を考えていきたいと思います。

さっき言った否定したい、というのはここです。「読書」の今までのイメージは1冊通読、小説系がその中心になっています。全部読んで、起承転結を掴んで、主人公の心変わりがどこだったのか掴んで、読書感想文がしっかり書ける、それはそれで大事なことです。でも、いろいろな課題を私たちはみんな抱えています。それを図書館で何とかしたいとすれば、複数の本の部分読書をすることになる。先ほどのカフェの話を例にすると、ハムトーストを作って出すことにしたなら、ハムトーストのレシピが載っている本の1ページあれば済むわけです。

複数の本の部分を集め、情報収集型読書と位置付けて、これも読書ではないか。読書習慣という時はこういう扱い方はしないし、〇〇君は何冊読みましたという時にも使わないです。でも図書館が通読だけを読書と言っていたら、やっぱり離れられなくなってしまう。

図書館の仕事は、人と情報を繋ぐことだと思っています。昔は利用者と本を繋ぐのが図書館でした。でも人と情報を繋ぐ、人とは地域住民全部、情報はありとあらゆる情報です。必要な情報を、周辺情報、図書館にない情報も含めて提供できる、そういう図書館でありたいと思います。

情報の量、速さでは東京にかなったくないです。だけど、だからこそ、地方だからこそ質の高い図書館が欲しい。そして、これは住民の皆さんがそう思ってくれないと、やっぱりダメなんです。でも、図書館

が見せないと、住民の皆さんは想像できない。静かに本を読む場所だと思っている。だから、提供する側とされる側の両方がイメージを変えていかないといけない問題だと思っています。

ということで、「役に立つ図書館とは」というフレーズに入っていきます。ステップで示していますが、1段目は「的確な情報提供」です。どこの図書館も心がけていることだと思います。2段目は「新たな情報との出会いを作り出す」。ブラウジングで、目当ての本の近くにある別の作者の本にこっちも面白そうだなと手を伸ばす、といったことは頻繁に図書館で起きています。テーマ展示や企画展示、日頃は閉架書庫や棚の隅にある本に光をあてて、〇〇特集とやるでしょう。そして3段目が「新しいサービスの創出」、4段目が「新しい図書館の創出」というように、ホップ、ステップ、ジャンプです。前段の2つは基礎編だと思っています。その上に応用編として、新しいサービスの創出が乗ってくる。これは、先ほど言った図書館の歴史からすると始まったばかりですので、まだまだこれからです。今日も事例発表でいろいろなお話が聞けるとと思います。

続いて、「図書館の蔵書と出版の年間比較」のグラフです。0から9とあるのが十進分類法です。青（左側）のグラフが、全国の市町村立図書館の蔵書構成割合です。9の文学が40%近くある。最近、4割を割りました。10数年前は42%位だったので、結構な比率で今減っています。これは多分、今日私が話しているような傾向が、全国的に広まりつつあるからだと思います。公共図書館の皆さん、4割が9類というのは実感としてどうですか？もちろん閉架書庫も入ります。

問題はこの赤（右側）です。1年間に出版された本の十進分類です。見ていただきたいのは、図書館では圧倒的な割合の9類は、出版では1位ではない。1位は3類の社会科学です。7類と9類がほぼ同率で2, 3位。これをどう見るか。統計はどう読むかで意味がいろいろととれるので、皆さんりの解釈をしていただければいいのですけれど、出版界全体が出そうとしている本は、読もうとしている人たちがいるから本にしようとするでしょうし、そこには書こうとする人もいるはずで、その本を待っている人たちが一定数いるだろう、と思われるから本になっていく。とすると、このグラフは世間の需要をそれなりに反映しているのではないかと。そう考えると、世間の関心事は文学だけではない、ということに行きついた。

そして、先ほどから言っている課題解決型図書館というのは、9類も入りますけれど、9類以外の本をきちんと集めていないと対応できない。ところが、限られた予算の中で9類に予算をつぎ込んでしまったら、9類以外が足りないのが当たり前ではないですか。そうすると図書館に行っても欲しい情報がない、という図書館に来ない7割の皆さんの声って、あながち外れていないのではないかと、という問題に私は行きついた。かなり深刻な問題として受け止めました。その人たちも一度は塩尻の図書館に来たかもしれない。塩尻の場合は近くに松本市がありますから松本へ行って、松本には本があるから塩尻には来ない、という人たちを作り出していたかもしれない。図書館が目指していた貸出重視・ベストセラー重視は、無料貸本屋批判の問題と裏表になっているのではないかと考えて、方針を変えました。

「旧館時の貸出状況（全館）」です。塩尻市立図書館は2009年に閉館して、2010年に新図書館をオープンしていますので、2008年までのデータになっています。2005年の6～7月に、先ほどの蔵書の見直しを始めています。何を見て欲しいのかということ、前年度比です。新館がオープンして、後で振り返ったら1割増し、1割増し、1割増し、最後2割増し。閉館までこの右肩上がりが続いていたので、2009年はもっと多かったです。結果的にこの数年で1.5倍増えました。その間、職員は増えていないので忙しくなります。貸出しが1.5倍になると、返却も1.5倍。予約も、もっと増えていました。一般図書だけでなく、児童図書もAV資料も雑誌も増えました。他にも見せ方の違いなどを始めていたのですが、欲しい資料がそこにあるという経験をしたら、また来てくれるようになった人たちが、どんどん増えていったのかな、と思っていました。

次に、世代別の利用状況を分析してみました。2011年は新館オープンした翌年です。2005年、2008年、2011年の3年ずつでどれだけ増えたかが、太字の数字です。中学生が旧館閉館の段階で既に5割増しになっているし、高校生は新館開館してから場所が良かったのか倍増している。中でも私が嬉しかったのは、30代40代が旧館の段階で既に4割増しになっていた。あの図書館にこんなに人が増えていた、本の利用が増えていた。新館になってさらに5割増しです。この、税金を1番払ってくれている働き盛り世代に結果が出たというのは、私はとても嬉しかったです。

次は、分類別蔵書割合です。見直しを始

めた2005年の9類は42.4%です。それが3年後には40%を切って、新館オープン時には37.8%まで下がっています。今は37%です。課題解決型を意識した活動をしている図書館は、大体35~7%位と私はみえています。都道府県立は元々の揃え方が違いますから、除きます。

ということで、「必要とされる図書館を創る」の3段目「新しいサービスの創出」についてでした。基板である1段目、2段目はもうやっていますね、と皆さんに言いましたけれど、実際に十分にやってきたかどうか、今の問題提起を聞いていかがだったでしょうか。パーフェクトはないですから、まだまだやることがあるなど、どこかで引っかかるものがあるとよかったなと思います。そして、基板がないのに課題解決型図書館をやろうというのは無理ですよ。だから、図書館としての基本の情報群をきちんと揃えて、その上に新しいサービスを作り出すんだという意気込みを乗せていきたい、という話にいくわけです。

図書館は知の拠点というフレーズが以前からありますが、違うよねと仲間とよく話します。図書館には集積されてない、図書館の外にこそ専門的知識は山積みにある。ですから図書館がすべきことは、その情報をもきちんと入手する。あるいは、そこへのアクセス方法を身につけて繋いであげる。「利用者と本を繋ぐ」なら、カウンターで、この本面白いですよと言えば済んでいだけれど、「地域にある情報を、それを必要とする人に繋ぐ」という仕事を図書館がやろうとするのであれば、どこにどんな情報があるのか、きちんと日頃から繋いでいなければ繋げません。例えば、行政との関わり、そして、ご近所との関わりです。できるところ、近いところから始めた

いですね。距離的な近さではなくて、声をかけやすいとか知り合いがいるなどの近さです。

まず行政支援サービスですが、これは当時とても深い反省をしました。郷土資料は大切だと言葉では言っていましたが、蔵書構成を調べた時に郷土資料を見ていったら、ないわな。本は集めているけれど、例えばPTA資料や会報、地元で出している公益的な情報、住民の足跡・記憶が全くなかった。行政資料も欠号がたくさんあった。

例えば議会の議事録。お互いに人事異動があつて、寄贈がポロっと抜ける。在庫がある分はもらえましたが、ないものはコピーしました。第何次〇〇計画の計画書も、終わったものは原課でも5年保存などで捨ててしまう。役場には書庫がないので、図書館が保存しなければダメだと思いました。図書館がその役目をきちんと意識してとことん集める。図書館にあるから原課では捨ててもいい、となるのが一番いいですね。もう手遅れの資料がたくさんあつて、郷土資料の大切さはつくづく反省しました。

そして、各部署との連携。例えば災害防止課がやっているサービスと図書館が組むことによって、より濃いサービスになる。住民にとって絶対プラスですし、庁内にも見せたい。庁内からも、図書館がそんなに役に立つなんて思われていません。7割の住民が、図書館は自分には関係ないと思っているのと同じです。7割の住民に関係する情報が1個もない図書館はないでしょう。その人たちは情報を絶対に欲しがっていて、その情報は絶対図書館にあるはずなんです。それと同じことが庁内の関係でも起きている。ですから、庁内の人に、図

書館に行けばあるかとも思ってもらえる環境を作りたい。行政から異動で来た人こそ、できるはずです。

【各図書館の事例を写真で紹介】

これは塩尻市立図書館の児童カウンター、隣が子育て支援センターのカウンターです。別々の場所にあった2つの施設が、同じところにカウンターを並べました。子どもたちは児童書架の前を通過して、奥の子育て支援センターに行く。ここができるまで子育て支援センターとは全く縁がなかったのが、すごく強い結び付きで子どもたち、お母さんたちにサービスができるようになりました。

それから、広報との連携です。以前に広報を担当していたので思いついたのですが、塩尻市の広報誌は10ページも12ページも特集を組みます。例えば9月には防災の特集をやります。防災の本は図書館に絶対ありますね。広報誌と関連本と一緒に置くことで防災に対する認識が高まると聞けば、防災を担当する部署にとって、こんなうれしい話はないです。そして広報誌は持ち帰ってもいいものです。塩尻市も自治会に入らない住民の方が増えています。自治会に入らないと広報誌の配布がないので、欲しい人たちは支所へもらいに行きますが、図書館に来てもいいことにしたわけですね。図書館へもらいに来て、そうすると関連本が置いてある。広報の皆さんも一生懸命、10何ページも苦労して作ったその記事が取り上げられて、市民の皆さんが関心をもってくれる。担当課にとってはこんな願ったり叶ったりはない。図書館も、利用してもらえたらこんなにいいことはない。三方良しです。これを広報担当が喜んで、1回目のゲラを図書館にくれるようになり、発行日に合わせて展示を開始で

きるようになりました。

ワインに関する資料のコーナーです。塩尻ワインは有名なので、もし旅行に来たら是非飲んで欲しいと思います。これだけの種類の資料を集めていけば、やっぱり使ってほしいし、繋ぎたい。市の農政課がワイン大学というのをやっていて、全国からソムリエになりたい人、ワイナリーを作りたい人、ぶどう農家をやりたい人たちが集まります。その農政課に声をかけて、受講生に三つ折りのチラシを配りました。受講生4～50人のためにチラシを作るという労力を使う話ですが、やろうよ、やろうよということで。そういう人たちに使ってもらってこそそのワイン資料ですから。ちょうど、図書館の上の会議室で大学が行われて、終わったらドドドドドドドとみんな降ってきて、棚の周りに集まる。見事なものでした。普通では購入しないソムリエの試験問題集などそういうものも全部、とにかくワイン関係の資料は集めていますから。問題は、「借りたいという人が高知県から来た人なんですけど、どうしましょう」と職員が相談に来て。館長が許可した場合、という規程を適用して借りてもらいました。

ということで、この体験が職員を変えました。その後、市の商工会議所の起業セミナーがあると聞いたら、そこへ本を持ち込んで時間を取ってもらう。それからJAの広報誌に折り込みチラシを挟んでもらう。折り込みは図書館でやると言っていますが、資料をくれるならJA側でやると言ってくれて、7千枚程を台車で持って行って、やってもらいました。成功体験が繋がる、という経験をしました。

これは企業展示です。図書館の中で行っています。翌朝の新聞に掲載されて、商工

課から「1社だけの展示をどうしてやるの？」とすぐに電話が来ました。「先月の広報誌で企業展示を図書館でやりませんか」と誘いを投げかけてあるので、どなたでもウェルカムですから商工課でものってください」と逆に言いました。

木曽漆器の工房が塩尻市にあります。木曽漆器祭というお祭りが6月にあって、そのポスターをこの壁に貼って、資料も展示しました。要するに、観光課が売り出したものの広報をしているわけです。行政支援です。ですが、市民に木曽漆器のことを知ってもらいたいというのは図書館の純粋な気持ちですので、これもやっぱり一石二鳥三鳥です。

それから学校図書館連携、この後の事例発表の中にもありますので、さらっといきます。少し変わった取組としては、市立図書館の職員と学校図書館の司書さんを、館長である私の下の1組織にしていまいしました。要するに、市立図書館の職員が学校図書館に司書として行っている。人事予算だけこちらへいただく。それで何ができるのかというと、学校図書館に行きたい司書さんがいるし、逆に学校には公共図書館へ来たい方がいるので、入れ替えができるようにした。もちろん両者の希望があつての話です。それから研修会もできるようにした。そして公共図書館に学校支援係をビシッと作った。学校図書館のことをいかに知らなかったのかというのを、連携を始めてから痛感しました。

「信州しおじり本の寺小屋」という事業で、印刷屋さんに小学生をバスで連れていっているところです。これは一旦置いておきます。「本の帯デザイン大募集！」という本の帯を作るイベントを図書館が行っています。本屋から数冊本を指定してもら

って、図書館で帯のデザインを募集する。最優秀に選ばれると、実際にその帯を巻いて本屋で売ってもらえます。この、帯を活用するというイベントは、先ほどの学校図書館応援チームが学校へ行った時、先生が本の帯を作ろうという授業をやって、その帯を廊下に飾ってあったのを見て、公共図書館でも飾ってみませんかと言った。公共図書館で展示すると、親御さんが来られる。しょっちゅう親子連れがいらっしやいました。そのアイデアをいただいて、今度は公共図書館主導でこの事業を行いました。先ほどの、訪問した印刷屋が協力してくれたのですが、市内にある4つの本屋で売るためだけに帯を刷ったら赤字しか出ません。図書館は1円も払っていないですから。本屋はいくらか儲けた。印刷屋にばかり負担を強いるようなイベントは続けられないと思っていたら、次の担当が考えてくれました。

「贈り帯」と書いて「おくりたい」と読めます。子どもに読ませたい本のブックリストの中から1冊選んで、メッセージをつけて、孫や姪っ子、大切な人に絵本をプレゼントしようという企画です。図書館の本を借りようではなくて、買ってプレゼントしようという企画です。赤白の帯に「〇〇ちゃん誕生日おめでとう」というメッセージを書ける。この帯は本屋のカウンターでもらえます。印刷屋には迷惑をかけないし、本屋に行ってもらおう企画に昇華させた。よくやったなど、その時思いました。

これは、図書館の児童コーナーです【ウォーリーの等身大パネルが置いてある写真】。担当者に話を聞いたら、出版社にも協力してもらえたそうです。出版社の方は、図書館から電話があつたのは初めてでびっくりして、最初は少し逃げ腰だったそ

うですが、パネルやいろいろなものを貸してくれた。ウォーリーを探すウォークラリーを、児童コーナーの中でやるわけです。考えつきそうなことですよね。書架から10cmくらいのウォーリーが覗いていたりする。その横にスタンプが置いてあって、スタンプを10個集めて景品をもらう、という文字どおりウォーリーを探すイベントです。

ここで、ひとひねりできますか？この担当は何をひねったか。景品の渡し場所を、書店にしているんです。スタンプが全部揃ったら、お母さんお父さんと一緒に書店に行く。書店に行くと、そこにウォーリーが積んであるわけです。やっぱり売れたそうです。ただ、後日書店の方に聞いたら、連れてきたお父さんお母さんが、ついでに買っていった本の方が、よほど多かったそうです。子どもには1冊しか買わないけれど、自分たちは2冊3冊4冊と買って帰ったそうです。

ナウマン象の実物大の模型です。長野県にナウマン象博物館がありまして、3Dの会社と段ボールの会社が協力して、模型を作りました。2社とも市内の企業ですので、企業名をドンと出している。「本の寺子屋」事業は、作家さんと読者を繋ぐ事業ということで有名な方も呼んでやりますが、子ども向けもやっています。その中で、子どもにナウマン象を同じ大きさで体験して欲しいという話が出て、この事業になりました。ナウマン象博物館は、信濃町という100kmくらい離れたところにありますが、初めて繋がった。これはMLA連携です。それから、立体模型を作った企業さんが広告をやってくださったので声かけをして、ビジネス支援に繋がっていった。そしてダンボールは木で作っています

ので、「木育（もくいく）」という木のおもちゃを子どもたちに、という事業に市が携わってしまして、子育て支援の方に繋がった。それから、3Dプリンターを図書館で買えたものですから、3Dの会社の方の講座を開催することに繋がった。地域の中で転がるんです。最初、ローで出発する時にはすごく力が入るのですが、動き出すとコロコロコロコロ転がっていくというのを何度も経験しました。一步踏み出すって大事だとすごく感じました。

「ご近所」については、複合施設、近隣施設、関係団体など幅広く考えてください。知人のいるところでも何でもいいです。

カウンターに立って、「今日面白い本何かあるか」と聞かれる、来るのを待っている図書館ではなくて、外にアンテナを伸ばして、外が欲しがっているものを何か探そう、そして創り出そうとする図書館になっていきたい、ということで、いくつか図書館を紹介します。

これは新潟県新発田市です。こちらのカウンターが児童カウンターで、こちらが子育て支援センターのカウンターです。この奥に支援センターがあります。児童コーナーではガラス越しに子どもたちが遊んでいるのが見えます。この棚の間を歩いていくと、その向こう側にはキッチンがあります。同じ階の中に共存できているんです。図書館は静かに本を読むところ、への挑戦だと思っています。

これは岡山県玉野市です。ガラス張りで中が半見えになっている。ここは学習室として使われているのですが、実はこの部屋、公民館です。公民館と図書館の複合施設で、図書館の中に公民館の会議室や調理室、畳の部屋もあります。日舞のお稽古終

わった人たちがここから出てきて図書館に入ってくる。こんな状態であるとは知らずに訪問して驚いた図書館の1つです。1つの挑戦ということで、紹介します。

それから福島県須賀川市。最上階にゴジラの円谷プロの博物館があるところです。この奥に畳の部屋があるのですが、ここは交流施設で貸し部屋です。部屋の周りに本が置いてありますが、これは図書館の本です。この部屋の周りの本棚の部分は図書館エリアではありません。図書館エリアは夜の8時で閉めて、職員も帰りますが、貸し部屋は夜9時までやっています。例えばそこに、日舞関連の本やお茶の本を配架したらどうですか？玄関に自動貸出機があるから借りていけます。実はこれ、塩尻市に須賀川市の方が視察に来られた時に、夜の1杯の席で私が漏らしたんです。「実はえんぱーくでやりたかったけれど、そこでやる勇気なかったんだよね」と話した。やってくれて嬉しかったです。

岐阜県可児市。カニミライブ 無印良品と書いてあります。カニミライブが図書館です。図書館の向こうに無印良品の品物が見えていて、ここに図書館とのなんとなくの境があるのですが、壁も扉もない。図書館エリアが全体の平面の真ん中にある。どうやって運営しているんだろう？無印良品が開店している日は図書館も開いています。これは市民とのワークショップで、ここまで練り上げたそうです。

高知の図書館です。「この図書館は会話ができる図書館です」と言い切っています。その代わりに、静かに本を読む部屋もあります。これは北海道の情報館です。貸出をしない公共図書館です。今紹介した図書館から、何か考えていただく、あるいは刺激を受けてもらえればいいかなと思います。

ます。

さらに、外にも出てみませんか、という話をしてみたいと思います。鳥取の小林さん。鳥取市は鳥取県の東の端にあるのですが、西の端の方の米子市の商工会の集まりに行って、図書館の資料がいかに関業に有益かという話をしているところです。資料の現物を持って行く。この話に絶対欠かせないのが、データベースです。データベースは図書館に行かないと使えないのですが、小林さんは持っています。プリンターも持って行って、この会が終わったら、この地域のカフェの分布を知りたい、というような相談を受けて、データベースで打ち出してお渡ししている。もちろんお金はもらいます。そういうことを夜に出かけて行ってやっている。

これは岐阜県多治見市です。このバックの中にあるのは、図書館がアーカイブしている写真をパネル化したものです。駅前通りのものなどをパネルにして、重ねて繋げると昔の商店街、50年前の商店街が再現する。アルツハイマーの回想法というのがありますが、それに使うために作っています。職員がお手伝いしている。今あるチェーン店は知らないけれど、「ここのお茶はうまかった、団子がうまかった」という話をするとう脳が活性化します。アーカイブ資料もこのように活用して、必要とする人に繋いでいけます。

これは紫波町です。紫波町のすごいところは、イベントが行われる時に、打ち合わせの段階から図書館職員も参加していることです。JAや町の農政課や農家の方が集まる打ち合わせに、職員である手塚さんご自身が参加している。打ち合わせに、関係する資料も持ち込む。この手塚さんを紹介した、常世田さんの文章です。「司書が

地域に出かけ、地域の事情に詳しくなり、多様な人脈を形成して初めて市民の多様な交流活動を支援する。」

アメリカの司書は地域のいろいろなパーティー、日本でいえば新年会とか、そこに司書として行っている。日本では、図書館長が呼ばれるのはまだあるかもしれませんが、アメリカでは司書が行って名刺交換している。日本の司書、図書館員、胆に命じなきゃなと思ったフレーズです。

「まちゼミ」という、塩尻市のイベントです。市内の商店街などの店主さんが、髪のカットの仕方とか、大根もちの作り方とか、ケーキの作り方とか、色々なお店の得意技を1日講師するイベントをやる。これがそのポスターですが、図書館も協力しようと思いますよね、地域支援ですから。で、相談に出かけて行って、見事に返り討ちにあって帰ってきました。ただでさえ忙しい中で、このイベントをやるだけで精一杯、図書館となんて、と言われてしまいました。それで終わりにしたら職員が気の毒なので、ポスターに書かれているお店に関連する本はいくらでもありますから、その本を並べて勝手に応援するコーナーを作りました。

決して間違いではないと思いますし、勝手に応援団なんて図書館の強い武器だと思ってやったのですが、後になって思いました。同じ街の中にいて、図書館も一緒にやらないかと声をかけてもらって、初めて図書館が地域の一員になった瞬間だよな、と思ったんです。つまり、いろいろ言わないでくれ、と言われているうちはまだダメだなと思って、「地域とともに生きる図書館」というフレーズに私は変わったんです。それまでは「地域を応援する」だった。このフレーズに変わったのは、日本でラグ

ビーのワールドカップが行われた「ワンチーム」の時です。図書館も地域とワンチームになってはいけないのかな、と思いました。地域を応援するだけではない、地域と一緒に初めて地域の図書館である。

ということで、地域の図書館になるということは、利用が増えること。先ほど貸出が増えたと言いましたけれど、今の塩尻市の1人当たりの貸出冊数は10冊です。長野県下でも断トツですが、それでも、市民の貸出し利用者数は20%いくかないかです。そんな現状です。

図書館に来ない方は、今のサービスでは来ないわけですから、新たなサービスを作り出していかなければいけないだろうというのが、行きついたところです。今までにないサービス。後半でずっと紹介してきたことは、静かに本を読むところからの脱却で、そこに新しい何かを付け加えたい。だけどイベント屋になるつもりは全くないので、それをやるための基盤は図書館の資料コレクションであり収集であり、その上にきちんとしたものを乗せて初めて新しい図書館サービスが成立する、ということで先ほどの話と繋げておいていただきたいと思います。

地域と繋がるサービスのために何が必要なのかという話でいうと、今までと同じことをやっていたらだめ、既成概念から私たち自身が離れないと、利用者が離れるわけがない。図書館を使っていないのですから、新しい図書館の姿なんて想像できるわけがない。図書館員でさえ二の足を踏んでいるところがたくさんあります。先ほどの新しい図書館の姿、どれかの図書館に腰が引けてないですか。ここまでやる？みたいな。

そういうところから、我が図書館バージ

ョンとはどんなだろう、と考えることがスタートするのかなと思っています。それぞれの地域は違いますから、どこかがやっているのをそのまま持ってきて同じことをできるわけではない。うちがやったらそれはどういう形になるだろう、ということを常に考えることです。前の人が色々な苦勞を積み上げてやっていますから、その苦勞を聞いて繰り返さない、これは後発隊のいいところです。いいところ取りするということでもいいと思いますね。そうして地域とともに歩む図書館を創っていかれたらと思っています。地域の一員になりたい、というのは今の、私の願いではありますね。

繋がってみたいところを資料に列記してあります。図書館に異動で来るつもりはなかったけど来てしまった、ではなくて、図書館に来ると今までの蓄積が活かせる、そんなことがあってもいいと思います。

ということで、先ほど横に置いておいた「あなたはどんな図書館ならもっと利用したいと思いますか」。今話をしてきた事例、課題解決や地域に役に立つ図書館の姿は、どこにもない。毎日新聞の記者でさえこの程度の選択肢しか書けない、それが世間です。こんな意識で図書館は見られているというのが私の危機感です。この世間の意識を変えるのが私たちの仕事で、それは大変なことだけれど、一気に変わるわけではないので、今日の1人明日の1人でいいと思います。新しい方と繋がっていく、その繰り返しでいいのかなと思っています。

1 つだけ言いたいのは、もし今頭の中で出来ない理由を考え始めているとしたら、やめてください。出来ない理由を考える暇があつたら、書架整理をやってください。やるための方策を考えましょう。お金がなくても人がいなくてもやれることがある、

と思ってやっている図書館がたくさんあります。出来ることの一步をやってみる。そして見せる。館内で評価されるかもしれないし、庁内で評価されるかもしれないし、自治体の中で評価されるかもしれない。失敗もあるかもしれませんが、怖がるのはやめましょう、と私は思っています。

ということで、時間になりましたので、これで終わりにしたいと思います。どうもありがとうございました。

事例発表①

「生涯学習館A o - n aオープンに伴う図書館サービスについて」

秋田県・横手市立横手図書館 館長 高橋 秀明

皆さんこんにちは、横手市立図書館の高橋です。今日はよろしくお願いいたします。

始めに、横手市立図書館について紹介させていただきます。平成17年に8市町村が合併して1つの横手市となりましたが、合併前には全部で8つの図書館がありました。現在は6つの図書館と2つの（公民館）図書室として運営しています。このうち旧横手図書館が、生涯学習館A o - n a（アオーナ）横手図書館として、昨年9月にオープンしました。

2階と3階に図書館が入っており、「生涯学習館のA o - n a」としての様々な機能の中に図書館があります。そのため、私は横手図書館の館長をしておりますが、A o - n aの館長もおります。2人で知恵を絞り、いろいろなイベントや図書館との連携等を含め、生涯学習館をどうしていくのかを考えながらやらせていただいております。

なお、合併以降、各図書館でもいろいろなイベントを行ってきましたが、伊東先生の話にもありましたとおり、有効登録率が令和5年度で17%ということで、83%の人は図書館のカードを作っていない状態です。それでも、なんとかして図書館をもっと知って欲しいというのが図書館スタッフの願いでした。そんな思いが通じたのか議会とも話し合いをしながら、駅前に図書館ができることになりました。今まで図書館に無関心だった8割の方々が「駅前に図書館ができる、駅前にA o - n aができる」ということで、否が応

でも図書館について興味をもっていただけるチャンスだ、このチャンスを逃すわけにはいかない、と思っていたところです。

上の写真は旧横手駅前です。下の写真が開発後の写真で、左側がA o - n aです。令和6年9月14日にオープンしています。これがA o - n aです。まず最初に市民アンケートを取ったり、中高生のワークショップなどを行いました。聞き取りをしていくと、今までの図書館ではありえない要望がいろいろとあり、例えば軽運動をしたい、映画を見たい、おしゃべりをしたり、ソファでくつろいだりできるような、少しはうるさくてもいい図書館ができないか、というような話がありました。そういった話を聞き取りしながら、できる限りやれる範囲でいろいろと考えながらA o - n aができております。

現在の収容冊数は18万冊と、以前の旧横手図書館の大体倍ほどの資料冊数になります。座席数は、1階から3階までで550席あり、年間の入館者目標を30万人と、少し大きい目標を掲げています。

オープンまでには、いろいろな図書館を視察させてもらったり、移転関連係を始め様々なアドバイスをいただきました。そこで言われたのは、「オープンが決まっていれば、必ずオープン日にオープンできます」というお話でした。我々も、9月14日はいろいろありましたけれど、きちんとオープンさせていただきました。マスコミにも取り上げられ、図書館とA o - n aに注目をしていただき

ました。

少しA o - n aの中身を紹介します。1階全体を「コミュニティスクエア」と言います。先ほどのアンケートにもあった、卓球やバドミントン、3パイ3のバスケットを行えるこの場所は「アクティブスタジオ」と言います。「スタジオ」では100人ほどのコンサートをやったり、映画鑑賞ができるようになっています。こちらは「ティーンズルーム」と言って、10代の方しか使えない部屋です。10代の学生たちが自分たちでルールを決めながら、この部屋を使っていくようになっています。

そして、受付の奥には最新の新聞や雑誌を置いています。1階部分は9時からオープンしていますので、こちらに最初の利用者が来て、新聞などを読んでいらっしやいます。

オープンスペースである1階の部分にも木箱を置いて、絵本などを飾っています。その時その時のテーマやイベントに合わせて、1階の自動貸出機で借りられます。

オープンスペースの階段を上っていくと、2階の図書館の方へ繋がります。

2階に上がると図書館フロアになっています。R型になっている部分には、姉妹都市のコーナーや横手市のメインとして「発酵文化」に関する本を置いています。特に発酵文化については、本だけではなく味噌や一升瓶なども置いています。また、姉妹都市のエリアについては、姉妹都市の方からいろいろな特産品を送ってくださったり、「可能であれば市報も置かせていただけないか」というような話もありました。こちらは漫画のコーナーです。横手市には「増田まんが美術館」がありますので、それにちなんで漫画のことを紹介しています。漫画は、貸出はせずにその場で読んでもらうという形で、こちらも1000冊ほど用意しています。こちらは「偉人

コーナー」と言い、8市町村の偉大な方々、今現在も活躍されている方々の様々な本や資料を置いています。今も活躍してる方々にはサインなどを書いていただいたり、写真を飾りながら、できるだけ分かりやすい偉人コーナーを作っています。

カウンターでは、様々な機能を使いながらご案内をしています。基本的には自動貸出機で借りてもらうことをルールとしています。

実は、A o - n aは基本的にBGMをかけています。そのため、どうしても音楽のないところで勉強したい、研究したいという方のために「静かな部屋」という部屋があります。やはり受験前やテスト前となると、学生たちが勉強しています。パソコンのカタカタという音も立てないようにしてもらいながら、集中的に勉強できる形になっています。

こちらはレファレンスルームです。利用者が何か本を調べたいという時は、相談デスクとして、こちらで司書と話をしながら本などの資料を探していただきます。

こちらはヨーロッパ風の部屋になっており、少しリッチなソファなどを置いています。誰でも使えるので、ここで本を読んでいる方もいます。「地域資料コーナー」では、特に大人の方が地域の事を学んだり研究したりするために優先的に利用できるようになっています。

このように、可能な限りソファや椅子などを置いていますし、いろいろなところで携帯等の電源が利用できるようにしています。これも様々な先進地を見て、今の子どもたち、利用者にとって電源は必要だと思い、いろいろなところに設置しています。

3階は児童図書フロアで、小学生までのお部屋となっており、子どもたちに喜んでもらえる空間作りをしています。「おはなしの部

屋」の奥には「ヘキサゴン棚」というものがあります。通り抜けができるので、子どもたちは走ったりしてしまいますが、できるだけ危なくないように注意して利用していただいています。また、おはなし会の人たちの活動をする場所としても使っていただいています。こちらは子どもたちが絵本を読んでいる間に、お母さんたちが座って本を読めるスペースです。ここにはお母さんが読めるような本も置いています。

実はこの3階は、外に出ることができます。「デッキ」と言いまして、図書館の中では飲み物だけを許可しているのですが、こちらでは食事も可能ですので、利用率が大変高いです。特に、高校生たちは少しビスケットを食べたいということになると、真っ先にこちらに来て、携帯を触りながら、友達とお話したりしています。残念ながら冬はこちらのデッキは閉鎖しています。

1階と2階の間にある「M(メザニン)階」には、閉架書庫や会議室、スタッフが休む場所、本などを修理する作業場などがあります。A o - n a の1番奥にあり、基本的にはパスワードを入れなければこの部屋に入ることができないようになっています。以上、A o - n a の紹介でした。

A o - n a の運営方針としては、駅前に新しい図書館ができるということで、賑わいを創出しなくてはいけないということが大きな使命の1つです。「人と人とが『つどい、つながる』交流拠点A o - n a」で会おうなというコンセプトのもと、運営をしています。そして、横手市の文化・産業・歴史についての展示を強化し、市民のシビックプライド醸成に努める、という生涯学習の大きな要としての施設にもなっています。

A o - n a の運営体制ですが、1階が生涯学習課、2館と3階が図書館課となっていま

す。我々は今、図書館バージョン3と言っておりますが、バージョン3の1番大きいところは、生涯学習課と図書館が線引きをしない、ということです。

1階で図書館のことを聞かれた際、生涯学習課が「分からない」と言わないようにしようということで、出来る限りマニュアルをお互いに出し合い、互いに1つの建物の中のスタッフだという考え方で、冬の雪かきも一緒にやります。A o - n a がイベントを行うとなれば、1階だけでなく、図書館も一緒になってやる、というような形です。どうしても分からないものは無線を使って応援を呼びながら、といった形でやっています。具体的には、小説家の講演会などがあれば、1階でその小説家の本を展示したり、ボードゲーム交流会があれば、そのゲームに関する本を飾るなど、常に連携しながらやっています。

令和6年度からの新しい図書サービスをどうするかということで、まずICTタグ化を思い切ってやりました。おかげ様で、ほとんどの利用者が自動貸出機で借りるようになりました。ある高齢者の方は、最初は「出来ない」と仰っていたのですが、今ではご自分で自動貸出機を使い借りていく人の方がほとんどの状況になっています。そして、今回1番横手市で頑張ったのが「蔵書点検をロボットでできないか」ということです。最初に、雄物川図書館でロボットが夜や休館日の日中に動いて行えないか、実験をしました。実験の結果、99.5%読み取りができ、これはいい、となりました。しかし、この実験は民間の方々と一緒にやらせていただいたのですが、その際にハッとさせられたことがありました。それは、子どもたちにロボットは人気があったことです。人気があるのに、ロボットを夜にだけ動かしてもいいのだろうか。そのことから、「蔵書点検ロボットあお

ーニャ」という名前にしました。あおーニャはA I が搭載されており、いろいろなお話ができます。また、記念写真を撮ったり、ぶつかりそうになると停止し、さらには本の場合まで案内もできます。お披露目会を行った際には1階のスタジオが満員になりました。現在も、2階の図書館にあおーニャを置いています。たまに少し具合が悪くなるのですが、しっかり動いて頑張っています。

A o - n a がオープンして予想外だったのですが、まず、学生がたくさん来ます。横手市にない学校の制服や、学生証をつけた子も大勢来ております。恐らく大仙市、湯沢市の方からもたくさん来ていただいているのだと思います。月初日は図書館の2階と3階が休みなのですが、1階は開いています。1階が図書館のような状態になってしまい、大変混雑しています。その際も、生涯学習課と図書館が協力して椅子を運んだりしています。

また、あおーニャが恋愛について相談するという出来事がありました。ある女子高生があおーニャに「愛とお金、どちらが大切ですか？」といったことを聞いたところ、あおーニャはしっかり答えていました。このように、生涯学習課と図書館課でいろいろと予想外なことが起きますが、その都度焦らずに冷静に対応しています。

先ほど言ったとおり、83%は図書館を利用していません。17%の方に対しては非常に大事にやってきたのですが、やはり83%の市民に知ってもらった方がいいということもありまして、オープンに合わせてチラシも作成しました。

また、1階でイベントがある際には生涯学習課も情報発信をしています。図書館は図書館でSNSを使っています。毎年の目標数を決めており、今年はフォロワー500人を

達成しようということで、その部分をみんな意識しており、現在400人を超えています。この意識付けが非常にいいと思っています。A o - n a のInstagramもあり、こちらはまだオープンして1年も経っていませんが、フォロワー数1,460人と、やはり意識付けがすごくいい結果だと思っています。

また、市民だけではなく企業に対してもどんどん図書館を売り込もうと考えており、雑誌スポンサー制度を取り入れています。雑誌スポンサーで、我々が今取り組もうとしているのは、まず図書館を知ってもらい、そのうえで、各企業でも昼休みに本を読むコーナーを作りませんか、というものです。企業で働いてる人は40代50代が多いと思いますので、その人たちに本を知ってもらうことにもなりますし、図書館と企業が繋がるということもやっていきたいと考えています。おかげ様で新しい企業とも繋がり、雑誌スポンサーが9件から28件と非常に増えており、もう置く場所が不足しており、増設を考えなくてはならないくらい、うれしい悲鳴となっています。

9月にオープンしてから、先日の5月21日に30万人を達成いたしました。1年間での目標でしたが、8カ月で達成しました。月ごとの来館者数も、令和5年の数字を全て超えております。新規登録数も、年間で250人だったものが、1,524人と非常に増えています。貸出冊数もう少し増やしたいのですが、毎日毎日勉強しにきてくれる子どもたちもいますので、大変うれしい誤算となっています。

是非皆さん、横手にいらしたらA o - n a に寄っていただければと思いますので、どうぞ今後ともよろしく願いいたします。ありがとうございました。

事例発表②

「図書館で復興・防災を学ぶ

～震災・防災学び合いスペース「I-ルーム」を拠点として～

岩手県立図書館 館長 森本 晋也

皆さん、こんにちは。ただいまご紹介いただきました、岩手県立図書館の森本と申します。

岩手県立図書館は、盛岡駅のすぐそばのいわて県民情報交流センターアイーナという複合施設の中に入っております。2022年に創立100周年を迎え、2023年には全国図書館大会岩手大会も開催して、皆様のご協力のもと、実りあるものにできたところでございます。改めて感謝申し上げます。

これは、2011年に県立図書館が東日本大震災で被災した時の状況や、被災地の支援活動に取り組んでいる様子の紹介です。東日本大震災から14年余りが経つわけですが、小中学生は東日本大震災を知らない世代になってきています。そして、学校の教職員や自治体の職員も、震災を経験していない世代が増えてきています。岩手大学のアンケート等でも、将来教員になった時に防災教育や復興教育を教える自信がないと答えた学生も、かなりの割合で増えてきていました。

東日本大震災の記憶を風化させず、今後懸念される大規模災害への備えの意識を醸成する必要があるという課題認識から、岩手県は「いわて県民計画第2期アクションプラン」において、岩手ならではの学習機会を提供することとしました。この計画に基づき、岩手県立図書館が震災津波資料の集中的な収集を行い、復興や防災・安全に関する県民への啓発、そして県内外への情報発信を担う拠点となることが目指されました。

こうした目的を達成するため、2023年11月に県立図書館内に震災・防災学び合いスペース「I-ルーム」が開設されました。元々は音と映像のコーナーでしたが、今はデジタル化も進んでいるため、改装しリニューアルしました。県立図書館としては恐らく、他にはないと思いますが、「震災伝承施設」としても登録しており、震災伝承の関連の会議にも出席しています。

改めてこの「I-ルーム」ですが、名前の由来は、児童・生徒、県民の皆さんのグループなどの学び「合い」、復興・防災教育などをテーマとする展示や豊富な参考資料に出「会い」、地域課題の解決のための情報（「I」 n f o m a t i o n）や進むべき方向を示す指標・指針（「I」 n d e x）を得る場、「愛」と希望に満ちた岩手県（「I」 w a t e P r e f e c t u r e）という風に、様々な「あい」をもってきて「I-ルーム」という名前にしております。

「I-ルーム」には、児童・生徒から大人まで、全ての人を対象として復興や防災を探究的に学ぶことを支援するという大きな狙いがあります。その実現のため、単に図書や資料を提供するだけでなく、図書館の強みであるレファレンス機能を通じた学習支援、ワークショップの企画・実施、さらには学校や各種団体への関連資料セットの貸出しといった取組を行っています。県民の皆様をはじめ、教育旅行や観光で訪れた方々にも、このI-ルームで自然災害や防災安全等について

総合的に学んでいただければと思っています。

このI-ルームには、県内の震災伝承施設等と連携し、防災に関する展示や各施設の特徴の紹介などを行い、沿岸部への誘客を促進するという沿岸地域のサテライト機能を置いています。I-ルームには開架・閉架あわせて、総数3万7000点余りの資料があります。図書資料だけではなく、震災の発災直後から県内で発行された避難所の手書きの新聞、様々なチラシといった、当時の状況を伝える様々な資料を収集しています。この1枚ものの資料は現在も収集を続けており、その数は1万9600点余りにのびります。こうした資料収集により、例えば創刊号のデータしかないという団体の方が、図書館に震災当時の紙の資料があることを知って来館される、といったケースも生まれています。

それでは、I-ルームの具体的な利用事例についてご紹介させていただきます。

岩手県立図書館のサービスの大部分は指定管理が担っています。指定管理に「ふるさと未来課」という4人のスタッフからなるI-ルームの専属課を作っていただきました。ふるさと未来課の皆さんには、様々な探究活動支援や、資料のセット貸出し、ワークショップの企画などI-ルームの業務を行っていただいております。

これは、I-ルームのオープン直前ですが、盛岡市立高校の生徒約80名が、SDGsをテーマにした総合的な探究の時間のために来館しました。職員が、グループごとの調査課題に合わせた資料を準備し、提供しました。生徒たちが調査を進める中で新たに出てきた疑問や、さらに調べたいことに対しても職員がアドバイスをしたり、次の資料の探し方をサポートしたりするという形で、探究的な学びの支援を行いました。

皆さんは、「フェーズフリー」という新しい防災の考え方をご存じでしょうか。これは、身のまわりにあるモノやサービスを、普段の「日常時」と災害などの「非常時」という区別なく、どちらの場面でも役立つようにデザインするという考え方です。例えば、日常は燃費の良い移動手段として、災害時は電源車として機能するハイブリッド車。普段は、デザイン性の高い食器として使い、いざという時には軽量カップにもなるカラフルな紙コップ。そして、日常の子育てで温めずに常温のまま赤ちゃんに与えられる液体ミルクなども、非常時にそのまま役立つという点でフェーズフリーの一例と言えます。このフェーズフリーの考え方をテーマにした取組を、県立図書館では一昨年から始めています。こちらは、昨年の活動の様子です。遠野市の女性部の方々と連携し、野菜を乾燥させたものや、郷土食などをフェーズフリーとして何か災害の備えにできるのではないかとアイデアを出すワークショップを行いました。今年度も計画していますが、もっと進化したものができないかと取り組んでいます。

これは、I-ルームがスタートした時に、基調講演・パネルディスカッションをさせていただいたものです。

これは、県立図書館で高校生が防災をテーマに総合的な探究の時間での取組について発表をしている時の様子です。高校生には発表の他にも防災ボトル作りのワークショップの講師を務めてもらいました。ワークショップに参加した小さい子どもさんから高齢者の方まで、高校生が直接教えてくれるということに大変喜んでいらっしゃいました。

大学の先生、自治体職員、NPO職員といった官民の関係者が集まり、東日本大震災を振り返って今後の教訓となる提言をまとめていくことを目的とした「いわて防災復興研

研究会」が昨年度、立ち上がりました。県立図書館はこの研究会と様々な連携を図っており、私も研究会に事務局として参加しています。これまで、様々なテーマで研究会を開催し、2月にはシンポジウムを開催したところです。本日、配布させていただいた資料は大船渡で発生した大規模の山林火災についての研究会のご案内です。この研究会はハイブリッド開催で、Zoomによるオンライン参加も可能ですので、是非、興味のある方はご参加いただけると幸いです。

これは、伊保内高校の生徒70名程が、復興・防災をテーマにした学習のために県立図書館を訪れた際の様子です。図書館では、学校から事前に生徒たちが調べたい課題について連絡を受け、職員がそれぞれのテーマに合わせて関連する本や資料を準備して生徒たちを迎えました。来館した生徒たちは、非常に熱心に資料を読み込んでいました。中には「もっとこういう資料はありませんか？」と職員に積極的に質問し、さらに学びを深めようとする生徒もいました。高校の先生に「生徒さんたちの集中力はすごいですね」と伝えたところ、「いや、学校での姿とは違います。」と驚かれた様子でした。図書館には、復興・防災という1つのテーマだけでも膨大な資料があります。生徒たちは、その中から自分の関心に合う資料を見つけたり、こんな資料もあるんだという新たな発見をしながら、学習へ取り組むことができたようです。この伊保内高校の生徒たちは、岩手県教育委員会主催の復興教育の児童生徒発表会のパネルディスカッションにも参加してくれました。私は司会者として参加しましたが、そのディスカッションの中で高校生が「図書館でいろいろなことを学び、改めて自分の故郷とはどういうものなのか、そして被災した沿岸部と自分たちが暮らす内陸部の地域を見

つめながら災害にどのように備えていかなければいけないのかということ強く思った。」と語ってくれました。図書館で勉強した成果をこのように発表してくれたことはとても印象に残っております。

中学生が来館した際には、私の方から震災が発生した時の釜石の子どもたちの避難行動や、地域の災害リスクなどを踏まえた災害への備えについての話をしたり、各自で設定したテーマについて調べ学習をしてもらいました。自分たちが住む地域のハザードマップを用いて、そこに大雨などの気象情報を提供しながらどう対応するかを具体的に考える「大雨洪水ワークショップ」も実施しました。

また、別の中学校では、三陸鉄道の震災学習列車に乗車する事前学習の場として、生徒たちがI-ルームで防災復興について学びました。その際に、ある生徒が震災の写真集をずっと見ており、私が「いや、熱心に見ているね。」と声をかけるとその生徒は「僕、震災の写真こんなに見るの初めてです。こんな出来事があったんですね。」と答えてくれました。その生徒が住む町も被災した地域でしたが、震災から十数年経った、今の中学生にとっては、こうした機会が震災について初めて深く知る貴重な場になっているのだと、改めて気付かされました。こちらの学校でも是非、台風大雨のワークショップをして欲しいと要望があり、後日、私が学校へ出向いて、全校生徒を対象とした出前ワークショップも行いました。

これは、大槌高校の生徒たちが探究学習の一環として県立図書館を訪れた際の事例です。大槌高校では、「教育・福祉」「産業振興」「震災伝承・防災」「地域コミュニティ」「環境保全」という5つの分野で探究学習を実施していました。石巻市の大川小学校や大槌町

役場、伝承施設などの視察を経て、震災防災について調べている生徒たちが、ぜひ県立図書館で中間発表を行い、図書館の職員とディスカッションがしたいと申し出てくれました。当日は、私と図書館の担当職員が参加し、生徒たちと今後どのように探究を深めていけばよいかについてディスカッションを行いました。ディスカッションを進めていくと生徒たちは震災を経験していない世代がどう震災伝承を担うかということを真剣に考えており、私は彼らに「では、皆さんが『震災』を思い出すのはどんな時ですか?」と問いを投げかけました。他のある生徒は「どうしたら地域住民が避難訓練に参加してくれるか。」を考えていたため、私は「ところで、皆さんは町の避難訓練に参加していますか?」と尋ねてみました。すると、生徒たちからは「いえ、参加していません。」「あんまり参加しても意味がないかなと思っています。」と率直な答えが返ってきました。そこで私は、「ぜひ、その『意味がないと思う理由』をしっかり調査して、どうすれば参加したくなるかを町に提言してみては。」とアドバイスをさせていただきました。高校生には、探究活動に必要な本も借りていただきました。後日、高校生から職員と一緒にディスカッションしたことがすごく良かった。自分たちの学びが深まったと感想が届きました。このグループは戻った後、さらに探究的にということで、今度はヒアリング調査として、震災を経験された方々へ聞き取りに行ったり、地域の人が集まる食堂などに出向いたりして調査を行ったそうです。さらに、AIを使い、集めた情報を基に、自分の名前を入れて当事者としてストーリーを作り、それを今度は町の人たちとディスカッションしようという取組を行ったそうです。2月に、県立図書館主催の「震災・防災つながるカフェ」と

いうイベントでこの高校生たちにオンラインで発表してもらったんですが、その高校生たちから自分たちは是非、参加した大人の人たちに聞きたいことがあるという問いが出ました。それは、「震災を経験していない、震災の記憶が薄い自分たちが、調査したとはいえ、それをAIにかけて扱ってもよいのだろうか。」という問いでした。参加者全員に考えさせられるものがあり、震災・防災について深く語り合う貴重な場となりました。

大分県の高校が、総合的な探究の時間で、防災教育をテーマに東日本大震災について調べたいということで、オンラインで、I-ルームと大分県の高校、沿岸の施設を繋ぎ、高校生の質問に答えるということも行いました。

I-ルームでは、県民向けの取組として、多様なセミナーや体験イベントも実施しています。学術的な講演会としては、東京大学大気海洋研究所の沿岸センターと連携した企画を行いました。この講演会では、バイオリギングという生き物自身にデータを取らせる新しい研究手法を用いて、海の中の世界を見ていただきました。また、「災害と妖怪」をテーマにバスで遠野市を訪れる企画も実施しました。このバスツアーでは、遠野市で災害食を体験したり伝承館を訪問したほか、古くから伝わる妖怪の話の中に含まれる「災害の教訓」を聞き学ぶ体験も取り入れました。その他にも、ゲームを含む様々なワークショップ、中学生による復興教育絵本の読み聞かせ、アイーナの館内で災害救助犬の実演を行うなど、幅広い層に向けた取組を行っています。

岩手県立図書館では、県内の震災伝承施設や学校への本の貸出し、関係機関との連携展示など、様々な活用を進めています。その成果として、これまでにないほど本の貸出しが

増加し、学校や大学の授業でも活用されるようになりました。

一方で、課題も抱えています。職員が各種研修会でブース展示を行うなど周知に努めていますが、学校の探究活動で図書館利用が少ないのが現状です。また、図書館のイベントの中でも、歴史や食べ物といった人気のテーマに比べると、「防災」をテーマにした企画は参加者が集まりにくい傾向があります。さらに、若い世代の関心をいかに引きつけ、巻き込んでいくかも大きな課題です。今後は、今日の学びで得た知見も生かしながら、これらの課題解決に向けて図書館としてさらに検討を進めていきたいと考えております。

ご清聴いただき、誠にありがとうございました。

事例発表③

「名取市図書館・学校図書館支援センターの取組み」

宮城県・名取市図書館 司書 古瀬 さおり

みなさん、こんにちは。名取市図書館 司書の古瀬と申します。本日はどうぞよろしくお願いいたします。

それでは早速、「名取市図書館・学校図書館支援センターの取組み」ということをご紹介します。

最初に名取市の紹介です。名取市は仙台市の南側に隣接しています。仙台空港をご利用なさったことのある方がたくさんいらっしゃるかと思うのですが、仙台空港という名前ではありますが、所在地は名取市になります。スライドには人口7万9千人と書いていますが、あと200人くらいで8万人になるという、人口が増えている都市でもあります。名取市には小中学校が15校あり、約7,500人の児童生徒が在籍しています。

その名取市のほぼ中央にある名取市図書館は、平成30年12月にリニューアルオープンし、令和7年3月に初めて年間の来館者数が30万人を突破することができました。記念のセレモニーでは、市長や教育長が駆けつけてくださったほか、職員の中で楽団に所属している者がいたことから、その伝で楽団を招き、管弦楽の演奏をセレモニーの中で行うことができました。貸出に限らず、閲覧やイベントへの参加などでも図書館を利用させていただきたいと思いながら仕事をしているところです。

それでは、学校図書館支援センターの取組みというテーマの前に、名取市の学校図書館について少しご紹介いたします。

昭和35年に小学校の図書館に学校司書が1人勤務していたという記録はあるのですが、紙の記録として残っているものは、昭和50年に「名取市小・中司書補会」という研修会を立ち上げたというものです。これは、個人宅で研修などを行っていたということでした。ブックトークのシナリオ作成や掲示物の作成を、冬休み中や仕事が終わってから個人宅で行っていたようです。その後、関係各所に請願をしまして、昭和52年度に初めて公的な研修会として認められ、開催することができたようです。

そして、平成27年度に「名取市学校司書研修会」に改名し、現在に至るまで研修活動を行っております。（スライドの）右下の「あゆみ」という冊子には、毎年の研修会の記録などを記載しており、年々記載事項や厚みが増えています。

現在、名取市には学校司書が16名おり、各小中学校に常駐しています。司書が常駐している図書館、いつでも人がいる図書館ということで、司書が切磋琢磨しながら学校図書館の運営に関わっているというところが大きな特徴だと思います。（スライドの）左側の方が司書が基本的に1人で行う業務、右側は司書教諭などと連携して行う業務になっています。このほかに、運動会などの学校行事への参加や、個人的に一番楽しくてやりがいのある仕事だと思っている、児童や生徒たちとのコミュニケーションが挙げられます。

このように多岐にわたる業務を、常駐とは

いえ1人でこなすのはなかなか大変かと思
い、学校司書の人たちを支援するために、2
013年に「学校図書館支援センター」を名
取市図書館内に設置しました。建物や部屋が
あるわけではないのですが、図書館の職員が
支援センターの職員として行っています。

対象は市内の小中学校の図書館です。20
13年に中学校の司書が正規職員から、今で
いう会計年度職員に変わったために、そのサ
ポートという意味合いも込められていて、そ
れも目的の1つになっています。

このスライドは学校図書館支援センター
の仕組みを図で表したものです。児童生徒を
支援している教職員や学校司書を、「ひと」
「もの」「情報」の力で支援しよう、小中学
校を丸ごと支援しようというのが名取市の
学校図書館支援センターの役割となっています。

ここからは具体例になります。先ほどの図
とは順序が変わってしまうのですが、まずな
くはならない「もの」ということで、物流
による支援の事例をご紹介します。

最初は、学校からの貸出依頼の受付です。
学校図書館を通して、児童や生徒、そして先
生方からのリクエストを受け付けています。
学校図書館の予算は限られていますので、名
取市図書館の蔵書を貸し出したり、リクエ
ストされたものを購入したりして学校に届け
ています。子どもたちが学校図書館で本を予
約して、そのまま学校図書館で本を受け取る
ことができるというのが大きなメリットだ
と思います。

本の配送にあたっては、図書館、市役所、
学校間の毎日の文書を運ぶ従来の仕組みを
活用するなどなるべく予算と労力を抑えて
配送できる形で行っています。

次に、学校からのレファレンス・資料相談

です。調べ学習用の図書や読書指導用の図書
の貸出などを行っています。例えば、ポプ
ディアを1セット貸して欲しいとか、授業で
児童一人一人が手に本を持って調べ学習が
できるように30冊同じテーマの本を貸し
て欲しい、というような要望に応えられる体
制を整えています。そのため、授業で使用する
頻度の高い資料は、複本として所蔵するよ
うにしています。

また、教科書も所蔵していますし、国語科
の教科書に載っているお薦めの本も、小学1
年生から6年生まで全てピックアップして、
図書館内に教科書関連コーナーとして棚を
作っています。

次は「ひと」の支援の紹介です。人の力、
人的支援ということで、名取市図書館支援セ
ンターでは、月に1回程度、中学校への巡回
訪問を行っています。

これには、連絡事項や情報共有のほかに、
相談業務があります。全体研修会などでは聞
けない細かいことや、一人職場での悩み、そ
ういった質問や悩みを受けられるような体
制を整えています。その場で答えられないも
のについては、持ち帰って班長始め職員全体
で共有できるような形で支援できるように
しています。

そのほかに実務支援として、図書館内のレ
イアウトを変えたいとか、棚の移動をしたい
といった時に、私たちも出向いて力仕事を一
緒に行う支援を行っています。

続いて、校外学習の受け入れです。小学校
2年生の生活科で「みんなであつかうまのし
せつ」という単元がありますが、この単元で
は、市内の全ての小学2年生が名取市図書館
へ校外学習で来てくれて見学を行っています。

先ほど、図書館に来たことのない人がたく
さんいるというお話が出ましたが、この校外

学習の時に「図書館に初めて来た」とか、「今度はお家の人を連れてきたい」といった小学生がおり、図書館としても、図書館のことをよく知ってもらえるととても良い機会だと思っています。私も学校図書館で働いていましたので、しばらく離れていた小学生たちと交流できる、とても楽しい機会になっています。

中学生対象の職場体験の受け入れも要望があれば行っています。中学生なのでもう少し踏み込んで、カウンター業務や配架作業、資料の整備作業など、図書館の職員が実際に行っている業務の一部を行ってもらっています。カウンター業務をやってもらおうと、「とても緊張した」という声や「市民の皆さん、地域の皆さんと触れ合うことができて楽しかった」という様々な意見をもらいます。私たち職員も、仕事をしていくうえで、とても貴重な意見や見方を子どもたちから教えてもらうことができ、一方的に支援しているのではなく、とても学ぶところが多いなと思っています。

また、支援センターの対象ではありませんが、市内にある大学、高専や高校などのインターンシップの受け入れも行っています。

3つ目は、「情報」による支援です。名取市図書館では、年に6回「学校図書館支援センターだより」を発行しており、市内の全ての小中学校の教職員に配布しています。

各小学校図書館でも、児童向けと先生向けの図書館だよりを両方とも発行している学校があるのですが、毎月出すのはなかなか大変だということで、名取市図書館で年に6回出しているところです。

内容は、図書館の案内、研修会や行事のお知らせ、教育関係資料の紹介、そしてお役立ち情報として様々なことを掲載しています。

例えば、図書館では著作権についての研修

会を行うことがあり、これは学校の先生方にもとても関連があることだと思います、そういったものを積極的にピックアップして掲載するようにしています。

そして、こちらはブックリスト作成のスライドです。小学校低学年、中学年、高学年と中学生向けということで、毎年4種類発行しています。各学校でも学校図書館だよりを発行してはいるのですが、どうしても新刊本の案内やお知らせを載せると紙面がいっぱいになってしまうということで、名取市図書館では本の紹介に特化したものを作成しています。司書が選書の時点から力を入れて選び、夏休み前などに配布できるように作成しています。本の選書から紹介文まで司書が作成しています。裏面には図書館の利用申請書、貸出カードを作る申込書を付けたり、特別貸出券といって、持っている本が1冊多く借りられるという券を遊び心として付けたりして、小学生にももっと図書館を利用してもらいたいと思って発行しています。

続いて、中学校の司書の研修会です。こちらも、月に1回程度行っています。現在は、図書館の会計年度職員を中学校へ派遣するという形になっているため、一堂に集まる機会を設けています。名取市図書館の一面を利用し、館内整理日など、他のお客様に影響のないところで行っています。基本的には名取市図書館で開催していますが、見学を兼ねて持ち回りで市内の中学校から1校選んで、お互いにほかの図書館の見学もできる仕組みになっています。

内容は情報交換、先ほどのブックリストの中学生版の作成のほかに、資料修理伝講会や、児童図書・優良図書の展示会を行っています。学校図書館にいますと、定期的な本の選書、買うか買わないか判断する会議をすることが難しいので、夏休み期間中に児童図書

や優良図書の展示会に参加できるということとは、大変助かるという声をいただいています。

図書館担当職員研修会は、小学校の司書や先生方、教職員の方も対象として年に3回行っています。

こちらのスライドは、「小中学校における新聞活用について」というテーマで実施した研修会の様子です。学校で小学生向けの新聞をとっているけれども、なかなか読まれないのでどうしたらよいでしょうという先生方の声から企画・立案したものになります。地元の新聞社に声をかけたところ、お引き受けくださったので実現したものです。

次に、文学講座になります。「平安文学の世界―光源氏のモデルは誰か?―」ということで、名取市にある大学の教授をお招きして行いました。大河ドラマが源氏物語をテーマにしたものだったことと、名取に縁のある藤原実方公という方がいるのですが、その方が光源氏のモデルの1人だといわれていることもあって企画したものです。

こちらは、「点字に触れてみませんか」というテーマで、実際に機械を使って点字を打つ作業をした研修会です。

名取市図書館では就労支援B型事業所の皆さんにCDやDVDの表紙に点字でタイトルを貼ってもらう作業を行ってもらっています。テラグラッサという事業所の方から、目が見えにくい方が、朗読CDを聞きたいですとか、映像はよく見えなくてもDVDを鑑賞したいのですが、並んでいる箱ではどれが何なのか分からないので点字を付けさせてもらえませんかというお声掛けをいただきました。それで点字タイトルを貼ってもらうということに至ったのですが、そのご縁でこの研修会が実現いたしました。

このように、名取市図書館では、多方面の

方々とのご縁やお力によって様々な取組ができていくということが大きくなっています。

続いて、「図書館を使った調べる学習コンクール」の紹介です。こちらの取りまとめや応募などもしています。これは全国コンクールではありますが、名取市内でも行っております。

「チャレンジ講座」といって、夏休み期間中に来館してくれた子どもたちに、調べ方の案内をしたり、虫博士、海博士など特別な外部の講師を呼んで特別講座を開催したりしています。そのような講座を開催して調べ学習をまとめたものをコンクールに応募するというような形になっています。

このほかに「中学生イラストコンテスト」「ポスターコンテスト」など載せ切れないのですけれども、たくさんのイベントを行っています。

最後に、私は以前学校図書館の司書をしており、その時はたくさん子どもたちが来てくれていたのですが、本が好きな子だけではなくて、なんとなくお話をしに来てくれる子ですとか、教室に入るのは難しくても図書館なら入ることができるというような子どもも一定数いました。そのような子たちが、ほっとした顔をしてそこにいたり、さっきまでお話をしていた子が突然本に没頭したりする姿を見て、学校図書館でやれることはこれからは無限大に広がっていく可能性があるんだなと感じています。そういうことも踏まえ、名取市図書館・学校図書館支援センターでは、今後も「いつでも人のいる学校図書館」「子どもたちの心の居場所」のために支援を展開したいと思っています。

駆け足ではありましたが、ご清聴ありがとうございました。

意見交換

テーマ

「多様化する時代の図書館 – 地域を支えるサービスとは –」

助言者 伊東 直登

(前松本大学図書館長・元塩尻市立図書館長)

発表者 高橋 秀明

(秋田県・横手市立横手図書館長)

森本 晋也

(岩手県立図書館長)

古瀬 さおり

(宮城県・名取市図書館 司書)

進行 成田 亮子

(秋田県立図書館 主幹)

成田

それではただ今から、意見交換の時間とさせていただきます。私は進行を務めます秋田県立図書館の成田亮子と申します。よろしくお願いいいたします。それでは始めに登壇者の方々をご紹介します。今大会の基調講演の講師、前松本大学図書館長、元塩尻市立図書館長の伊東直登先生です。続きまして、本日の事例発表の方々です。秋田県からは横手市立横手図書館長の高橋秀明さん、岩手県立図書館長の森本晋也さん、宮城県名取市図書館司書の古瀬さおりさんです。短い時間ではありますが、どうぞよろしくお願いいいたします。

この時間は、登壇者の方々による意見交換をメインとする形で進めたいと思います。それぞれの発表について、お考えになったこと、お感じになったことなどのお話を伺いまして、理解を深めるという時間にしたいと考えております。会場の皆様からいただきました質問票については、いくつかピックアップして、回答させていただく予定です。本日お答えできなかった分については、大会終了後に別途事務局で取りまとめ、皆様と共有をさせていただきます。よろしくお願いいいたします。

それでは、本日、非常に特色のある取組に

についてお話しいただきましたけれども、事例発表の方々に互いの発表をお聞きになって、学びになった点、また感想、他の発表者の方に質問されたい点などありましたら伺っていきたいと思います。それでは発表された順番ということで、横手図書館の高橋館長からお願ひできますでしょうか。

高橋

まず、岩手県立図書館のI-ルームのお話を聞き、秋田県も震災がありましたが、年に1回だけの企画展だけに終わってしまう中で、I-ルームなどがあれば非常にいいなと思ったところです。伊東先生の話にもありましたように、外に出て、他の行政の方々と話しながら、いろいろなことをやっていかなければいけないと思います。A o - n a の場合は1階で様々なイベントができますので、I-ルームのようにはできないかもしれませんが、災害に関しては、図書館としてテーマをもたなければいけないと思ったところです。本当にありがとうございました。

名取市さんの学校図書館との連携は、当館でも年に何回か学校図書館との研修を行っておりますので、大変為になったお話でした。特に実務支援の部分で、例えば棚移動の

手伝いをどのようにしているのか、全く分からない状況なので、今度の研修会の時に実際の状況を知ることができればいいなと思いました。また、学校図書館と市立図書館では、「横手市図書館を使った調べる学習コンクール」を行っており、今年で2回目です。この学校連携についても話合いを増やしていく必要があると感じました。

また、話は戻りますが、岩手県立図書館長のお話にあった次の世代の子どもたちが分からなくなっている過去の災害についても、図書館で話合いをして企画展示などで伝えていく事が重要だと思いました。どうもありがとうございました。

成田

ありがとうございました。では続きまして、岩手県立図書館の森本館長、お願いいたします。

森本

はい。よろしく願いいたします。最初に横手図書館のお話を聞いて、あおニャにも早く会いたいと思ったのですが、今求められている図書館が凝縮していて、そして街の中心に賑いを作り出す拠点がある。まさに地域を作っていく拠点となる、A o - n a 自体がそういった施設になっていて、本当に素晴らしいと感じました。来館者もたくさん増えているというお話もありましたので、当館としても少しでも、何か参考にできればと思ったところでした。

せっかくなのでお伺いしたいのですが、岩手県立図書館も立地状況として盛岡駅のすぐそばですので、中高生から学習利用を非常にたくさんしていただいているのですが、なかなか本の利用には向かなくて。どんなことをすれば、中高生がもう少し本に触れると

か、図書館としての資源を利用してもらうことができるかと考えているのですが、横手図書館さんで何かされていることや、考えていることがあれば教えていただきたいです。

名取市図書館の学校図書館支援センターについては、私は元々中学校の社会科の教員なのですが、このように支援していただければ、特に社会科というのは、今はどんどん調べる科目となっており、探究の学びに舵を切っているところですので、ありがたいと思いました。その人、物、情報、そしてスタッフを支える、図書館司書を支える研修や仕組みも素晴らしいと感じました。お伺いしたいのは、学校図書館の支援をされて、活性化を図られていて、例えば先生方の学校図書館への意識が変わって調べ学習で使うようになったとか、子どもたちが学校図書館に来るようになったとか、利用の変化があれば教えていただきたいと思います。ありがとうございました。

成田

ありがとうございました。それでは横手図書館の高橋館長、今、森本館長からご質問ありましたが、どのように中学生、高校生の図書館の利用に結び付けていくかという取組についてはいかがでしょう。

高橋

それに関しては大変耳の痛い話でして、実は当館でもすごく大きな課題となっています。多くの方々に利用していただいています。特に中高生は自分たちが持ってきた教科書とノートで勉強するのがメインになってしまっていますので、どのように本に触れてもらうかというのは課題となっています。選書の在り方も含めて、いろいろと考えているところです。今日の伊東先生のお話にあっ

た、各分類の本の分析をまず先にしなければいけない、本当に求められているものか、という視点は、とても参考になりました。単に選書のルールに乗っ取って本を買うのではなく、横手らしく、今日お話があった「地域にとって役立つ図書館」として、新しい選書の考え方の中で、子どもたちが本に触れる機会を増やすことが出来ればいいなと思いましたので、この辺はしっかり分析をしながらやっていきたいと思います。答えになっていなくて大変すみません。

成田

ありがとうございます。では名取市図書館の古瀬さんはいかがでしょう。

古瀬

はい。先生方や子どもたちからの反応というところですが、先ほどご紹介した中で、校外学習の受け入れというのがありました。実は、少し前までは全く申し込みがありませんでした。この学校図書館支援センターを立ち上げて、学校に働き掛けをしていく中で、現在では市内の小学校全てで、校外学習に来てくれるという流れになり、興味をもっていたというところでした。

成田

はい。ありがとうございます。では続きまして古瀬さん、本日の発表をお聞きになっていかがでしたでしょうか。

古瀬

最初に、横手図書館ですが、それぞれ考えられたレイアウトで、まさか図書館にスポーツができる施設があるというのは考えつかなかったもので、とても面白いと思いました。またBGMについては、名取市図書館でも一

角にカフェがあり、そこでBGMを流しているのですが、1箇所だけでBGMを流しているという状態です。しかし、A o - n a は全体にBGMを流して、その他にきちんと静かな部屋を作っているということで、いろいろなニーズに対応した部屋が作られているところが、本当に考えられていると、とても驚きました。また、運営組織のところがとても感動した部分で、同じ施設にある生涯学習課と図書館課でどういった質問が来ても、他の課のことでも答えられるようにというのが素敵だと思いました。名取市図書館も、増田公民館が上の階にあり、もちろん協力し合っているのですが、たまに増田公民館の詳しいことを聞かれても「分からないので上の階へ」と送り出してしまっているのも、こうしたところを参考にさせていただきたいと思いました。

続いて岩手県立図書館ですが、中学2年生くらいまでは震災を経験したことがないという中で、高校生が熱心にパネルディスカッションをする、しかもAIを活用するという素晴らしい取組だと思いました。県内の高校にどのようにしてI-ルームというものをPRしたのかを教えてください。

成田

では県内の学校へのPRについて森本館長、お願いいたします。

森本

はい、ありがとうございます。文書でお知らせもするのですが、それだけではなかなか周知できないということで、県立学校との会議や、市町村教育委員会との会議で、できるだけ具体的なお知らせをお伝えします。それから、ふるさと未来課の皆さんに、防災教育の県の研修会や、各教育事務所で開催している

復興教育の研修会、様々な先生方が集まる研修会、発表会に行ってブース展示をしていたいています。会に参加している方に実際の本を見てもらい、どんなサービスができるかを知っていただくということもやっていました。

また、私も学校で講演をする機会がある時には、自分が行く前にできるだけ本をセットで借りてくださいと伝えます。そして、実際に借りていただくなど、少しずつ利用が増えてきています。最近では、先生方の図書館の研修会をI-ルームで開催していただき、その研修会のメニューに県立図書館がみっちりハマっていき、I-ルームも含めて探究的な学びを県立図書館でできるというのを、講義と演習などでお伝えする機会をいただきました。学校の先生方も忙しいので、働き方改革の中で、こちらが何をできるかというのをお伝えしています。

成田

ありがとうございました。今、3名の方にそれぞれお話いただいたわけですが、伊東先生、何か補足やご助言などございましたらお願いいたします。

伊東

楽しく聞かせていただいたので、補足ではなくて、少し感想を喋らせてもらおうと思います。岩手県立さんと名取市さんの話を聞いていると、やはり現場のことを知っているなという感じがすごかったです。発表の内容そのものも、とても大切な分野なので、それぞれ皆さん関心があったと思います。

今日のテーマ的に言うと、自分の知っているところ、分かっているところに手を出している。手を出していけるというチャンスがあるのはいいことだなと思って、具体的な流れ

がどうだったかというのは分かりませんが、恐らく何かしらのきっかけを自分で作られたのか、周りにあったのか分かりませんが、だからこそ深い取組になったのだろうなというものがありました。今日ここにいらっしゃる皆さんも「この分野ならできる」みたいな、全部の分野をやれたら一番いいに決まっているのですが、そんなことはできるわけがないので、それなりのテーマを見つけてもらえればいいのかなどと思いながら聞いていました。

横手図書館さんの場合は、新しい図書館を作るということを一つのきっかけにして一歩を踏み出しているということです。私が先ほど話したことに一つ補足をさせていただきたいのですが、新館を作るとはいろいろなことを経験したり考えたりする大きなチャンスです。ただ、私の今日の講演でも、新館前に利用が1.5倍になったと話しました。新館がオープンになっていなくても、成果は出せていたわけですので、新館がチャンスの全てではない、ということはいわなければいけなかったと思っていました。その上で、新館というチャンスに今取り組まれていると思いますが、アンケートをしたら思いがけない声がたくさん上がってきた。思いがけない声が上がってくると、割と行政サイドは、「いやそうは言っても」という声が出るはずなのですが、そこにチャンネルを切り替えることができた。切り替える一方で、一歩踏み出せた何かがあったのかどうか。それともう一つ、館長さんとして職員を引っ張っていかなければいけないので、職員の皆さんはどうだったのかというのがとても気になりました。その辺はいかがでしょう。

高橋

まず図書館を駅前に持ってくるというの

は、市として大きな決断になりました。当初は市の教育委員会ではなくて市の企画を考える課で担当していました。その課と教育委員会が話をしている内に、教育委員会の方の企画担当が入ってきて、最終的には教育委員会メインで動くという形になってきました。そして市の議会も含めて、新しい図書館を作っていくという流れの中から、図書館をどのようにしていくかというところで、市民アンケートなどの要望に対し、図書館として何をチャレンジしていくか、教育委員会の中でじっくりと議論をすることが出来ました。

そして、単に古い図書館から新しい図書館になるだけではダメだという意識については、なかなかその辺がピンときていないスタッフもいたと思います。他の先進地の図書館を見ていきながら、こういう図書館を目指していこうと話をしました。その上で横手市の図書館として何ができるのかというのはミーティングや話を何度も重ねて、オープンの日を迎えました。オープン後も、まだまだどのようにしていったらいいか決まっていなくてもあるのですが、今は人がたくさん来ていますので、いかにして来てくれる方々に、図書館の楽しさを知ってもらうかというのを、皆が同じベクトルで考えながらやっているところです。

成田

ありがとうございました。それぞれの方からご発言いただき、伊東先生からもお話をいただきました。それでは、ここで進行役の方から質問させていただければと思います。会場からいただいた質問票とも被っている部分はあるのですが、今日の発表された皆さんがそれぞれ取り組まれている中で、地域であったり、行政の他の機関であったり学校であったり様々ですけれども、そういった連携先

とのきっかけづくり、また地域の人たちと繋がっていく時なぜそこを選んだのか、あるいはどのように連携のお話を作っていたのか、あるいはそれを続けていく中で苦心されている点などありましたら、3名の方々からそれぞれ教えていただければと思います。では次は名取市図書館、古瀬さんからお願いできますでしょうか。

古瀬

はい。地域の連携先とのきっかけづくりということで、お話ボランティアさんの例でお話しさせていただきたいと思います。先ほど表彰を受けた名取市図書館のお話キラキラの会さんは、長きにわたって名取市図書館でお話ボランティアをしてくださっています。長い間連携しているので、長い歴史の中で新しくお話会を立ち上げてくださっている方々もいます。こういったことをして欲しいという要望があったり、図書館に対する様々な意見の調整をするために、お話ボランティアの連絡会議を月に1回開催し、意見交換をできるようにしています。始まる時間は決まっていますが、終わりの時間が決まっていなくて、毎回2時間以上、活発な意見が出ます。そうしたところから行事へのアイデアや、利用者目線の細かい気付きのようなものを教えていただいています。ボランティアをやっていると思いますが、任せっきりにするのではなくて、意思の疎通を密に行うことによって、アプローチの仕方でお互いに支え合っているように、ということを名取市図書館では心がけています。

成田

続きまして森本様、お願いします。

森本

連携というところになるのですが、特にI-ルームについてご紹介します。先ほど、伊東先生からコメントをいただきましたが、強みのあるところ、例えば私であれば教育委員会所属ですので、学校関係の研究会や知っている先生方に、是非当館を使ってくださいと話して連携しています。それから、県立図書館は指定管理のサービス部門があり、常に様々な情報、県の動きを把握し、積極的に連絡を取ってくれて様々な企画・催事をしていただいています。例えば災害救助犬の企画や遠野のバスツアーは、指定管理の企画です。それぞれが持っている強みが、うまくI-ルームで複合的に連携が広がっていているなというのを感じています。I-ルームにも多少予算があり、一点突破で全面展開のような感じで図書館を拠点として動くことができている、これが今強みになっていると思います。ただ、やはり県として様々な課題、人口減少の問題であるとか地域おこしであるとか産業振興であるとか、さらにそういった課題にもっていけるような連携もできるといかなと、今後の課題として考えています。

成田

ありがとうございました。横手の高橋さんお願いいたします。

高橋

はい。地域の連携については、各図書館がそれぞれの地域の方々とお話をしながら一緒にやれるところを探りながら進めています。図書館側から近づいて行っている例としては、「かまくら祭り」や、雄物川地区で開催している「は・は・は祭り」の時は、お祭りが終わるまで、普段は7時で閉館のところを9時まで開館し、お祭りを楽しんでもらい

ながら図書館にも入ってきてもらうということもしています。また、展示の企画が横手市全体にとって良いと思われるテーマの時は、6図書館を巡回で展示し、その地域だけで終わらない仕掛けもタイミングに合わせて行っています。

成田

ありがとうございました。それぞれ特色ある取組の中で、創意工夫、またいろいろな考えを出しながら、進められているというお話でした。それでは続きまして、伊東先生にもお聞きしたいのですが、先ほども、新館が非常に大きなチャンスであるという話もあったわけなのですが、例えば小規模な図書館で、またリニューアルや新設の予定がないようなところで、地域と新たに関わっていくとか一步を踏み出すというために必要なことについて、どのようにお考えになっていますでしょうか。

伊東

はい。小さい大きいであまり考えたことはないのですが、やはり人の問題が大きいでしょうね。この中にも、多分うちは小さいという方もいらっしゃると思いますが、要はそこに割ける人がいるかいないか、というところが1番大きいのしかかってしまうと思います。何事も人ですのでね。それ抜きで考えると、大きい小さいはあまり意識してなくていい。やはり、できるところに職員という資源を継ぎ込めるかどうかだけですので、その中で自分の図書館でやれるところはここだ、というところを一個ずつ見つけてくという作業でいいのかなと思います。逆に言えば大きい図書館は住民もそれだけ多いわけですので、抱えている範囲も広がってしまう。だから、それなりに多くの人が必要にな

ってしまうことを考えると、図書館が大きい小さいはあまり関係ないのかなと思います。

成田

それぞれの地域性や、図書館の強みなどを生かして、ということになりますでしょうか。

ありがとうございました。では時間の方もかなり少なくなってきたのはいるのですが、質問票を何枚か頂いておりますので、ここでいくつか取り上げさせていただきたいと思います。まず、伊東先生への質問です。秋田県教育庁生涯学習課の山内様からです。塩尻市の学校図書館との連携の仕方はとても画期的だと思いました。学校図書館の環境や利用状況にどのようなポジティブな変化が出ているか教えて欲しいですという質問です。

伊東

私も現場を離れてだいぶ経っていますので、何がポジティブかというのをお話するのは難しいのですが、一つの例としては、学校で取り組みたいテーマについて公共図書館、市立図書館がレファレンス兼支援のような形で関わっています。例えば、塩尻市の戦争の話というテーマで、市立図書館にある限りの資料を掘り出して、総合学習の時間に司書が出かけて行き、公共図書館の職員と学校図書館の司書と先生とか、みんなでグループ学習に付き合うのですね。それを設定できる空気が、学校図書館と公共図書館の間に生まれているのだと、その話を聞いた時にすごくうれしく思いました。導入の時は反発もあって、結構苦労した経験をもっていたのですが、今その風通しがすごく良くなって、お互いが協力し合うという形が取れているし、図書館にとっていいことではなくて、子どもたちにとっていいことなので、これは良かった

と思っています。

成田

ありがとうございました。では、実はまだ質問票を頂いているのですが、時間になってしまいました。大変申し訳ありません。後ほど事務局の方で質問の回答をとりまとめ、皆様にお示ししたいと思います。

それでは、伊東先生、本日の大会のテーマ「地域を支えるサービス」について発表いただき、また意見交換をしていただいたところではあるのですが、最後に、北日本の図書館の我々に何かメッセージなどあればお願いいたします。

伊東

今日発表いただいたお三方、それぞれ図書館をいかに利用してもらうかというテーマですし、防災という私たちも避けて通れない課題ですし、それから学校連携、学校支援というのは図書館としてお互いに考えていかなければいけないことで、とても深い、まさに私たちにとっての課題解決事業なのかなと思ってお聞きしていました。15分では短かったと思いながらお聞きしていたのですが、15分聞いただけでとても盛りだくさんに感じませんでしたか。テーマとしては今言った一個ずつです。けれどその一個ずつについて取り組み始めてしまうと、こんなに湧いてくるのです。このテーマからこっちと繋がりと、このテーマが繋がったことでこっちのこんなことと繋がりができて、というお話が次から次へと出ていました。「何か一步から始めましょうよ」と私が最後に言ったのがまさにこれだと思うのですね。何かを始めた事が次から次へと繋がっていく、ローからセカンド、サードへと、パワーアップできている経験をする。この成功体験は小さなことでい

いのです。必ず他の事業に転換するときに、とても楽にこんなこともやれるかもという発想に繋がります。今日聞いていただいたような事例や、あるいは全く別の自分が得意な分野でもいいです。是非持ち帰って、仲間と同僚と相談をして、どうだろうという話をしてみたらいかがでしょう。

成田

伊東先生ありがとうございました。明日から職場に行って、一歩でも踏み出してみようと思えるような、たくさんのヒントを今日、受け取ることができたと思います。大変貴重なお話をいただきまして感謝申し上げます。それでは、改めて伊東先生と発表者の方々へ、拍手をお願いいたします。以上をもちまして意見交換を終了させていただきます。ご参加の皆様もご協力ありがとうございました。

閉会式

主催者あいさつ

秋田県図書館協会 会長 田中 博光

第76回北日本図書館大会秋田大会・第4
9回秋田県図書館大会の閉会にあたり、主催
者を代表いたしまして、一言ご挨拶申し上げます。

「多様化する時代の図書館 ―地域を支
えるサービスとは―」をテーマに、今大会を
開催いたしましたところ、北海道、東北各県
から、遠路たくさんの皆さまにご参加をいた
だきました。誠にありがとうございました。

御参加いただいた皆様のお立場はそれぞ
れですが、いかにして図書館サービスを充実
させるか、地域に貢献できるかということに
取り組んでいる者同士、同じ時間を共有でき
たことが何よりの収穫ではなかったかと思
います。

本日は伊東先生のご講演、様々な取組の事
例発表と意見交換をとおして、多様化する時
代の図書館の在り方について新たな気づき
を得ることができたのではないのでしょうか。
地域の課題や利用者のニーズを見据えなが
ら、図書館として何ができるのかを、今後と
も皆様と共に考えてまいりたいと思います。

ご講演いただいた伊東先生、事例発表をし
ていただいた横手図書館・高橋館長、岩手県
立図書館・森本館長、名取市図書館・古瀬様、
改めましてありがとうございました。

結びに、今大会の開催にあたり、ご尽力い
ただきました北海道立図書館・岸本館長はじ
め、連盟事務局の皆様、大会運営にご協力い
ただいた全ての皆様に感謝申し上げまして、
閉会の挨拶といたします。本日はありがとう

次期開催県あいさつ

岩手県立図書館長 森本 晋也

岩手県立図書館の森本でございます。次期開催県として、一言ご挨拶を申し上げます。

本日は、第76回北日本図書館大会秋田大会、第49回秋田県図書館大会を通じまして、社会の変化に対応しながら地域を支える図書館サービスの在り方をはじめ、これからの図書館の在り方について多くのことを学ぶことができました。私も先ほどまでディスカッションの中に参加させていただいたわけですが、図書館がもっている資源には、地域住民の方々が豊かな人生を歩んでいくために寄与できるものがたくさんあるということ、そして様々な地域課題に対して突破口を見つけることができることを、伊東先生の基調講演をはじめ、事例発表とディスカッションからたくさん学ぶことができました。

この素晴らしい大会を企画段階から準備して、本日も丁寧に運営されてきました秋田県図書館協会田中会長様をはじめ、この大会を支えてくださった関係者の皆様に心より感謝を申し上げます。本当にありがとうございます。

さて、次回の大会は、来年6月19日金曜日、岩手県立図書館が入っております、盛岡駅すぐそばのいわて県民情報交流センターで開催いたします。テーマは現在まだ調整中ですが、本日の大会を踏まえまして、皆様と共に未来の図書館の在り方を考える機会にしていきたいと考えております。盛岡の地で、再び皆様とお目にかかれることを楽しみにしております。是非多くの方々に岩手に、盛岡にお越しいただきますようお願い申し

上げて、私からの挨拶とさせていただきます。

来年、盛岡でお待ちしておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

地域を支える図書館サービスを考える

伊 東 直 登

■本日考えてみたいこと

なぜ、「地域」がテーマになるのでしょうか？

図書館とは何をするところなのでしょうか？

図書館の可能性って何でしょうか？

■図書館、必要とされていますか？

☐ 図書館のイメージは？ 本を読み借りるところ 本好きが行くところ
子どもが勉強しに行くところ 静かなところ
静かにすべきところ

Q. あなたは、ふだんどのくらい 図書館に行きますか？
少なくとも週に1度は行く。
少なくとも月に1度は行く。
数カ月に1度は行く。
ほとんど行かない。

Q. あなたは、どんな図書館ならもっと利用したいと思いますか？
面白い本がある 本の種類や数が多い 雑誌が読める 新聞が読める
最新のCD・DVDが利用できる いつでも開館している
自由に使えるパソコン・タブレットがある パソコンで貸し出しや検索ができる
家から近い その他 「2017年版読書世論調査」毎日新聞社

☐ 日本の読書の1断面

貸出サービスの状況	・日 本	約 5冊/人/年
	・イギリス	約 10冊/人/年
	・フィンランド	約 20冊/人/年

□そもそも今までの図書館って？

戦前 : 有料・閉架・閲覧中心

図書館法(1950) ⇒ 無料・開架・貸出・レファレンス

『中小レポート』1963・『市民の図書館』1970

⇒貸出サービス・児童サービス・全域サービス

□結果 図書館の充実 1970 : 881館 ⇒ 2019 : 3,303館

貸出数の急増 1970 : 2千万冊 ⇒ 2019 : 68千万冊

□もう一つの結果 読書の館 無料貸本屋批判

⇒ それでも年5冊/人

⇒ だから、年5冊/人!?

一方で、地域経済の疲弊・行き詰まり感

行政改革・ファシリティマネジメント

そして、コロナ禍

⇒ 図書館って必要？

□そこで、これからの図書館

『これからの図書館像 ～地域を支える情報拠点を目指して～』(2006)

『図書館の設置及び運営上の望ましい基準』(2012)

読書の館・無料貸本屋からの脱却

⇒ みんなに利用される図書館 課題解決型図書館 = 地域に役立つ図書館

⇔ 一部の人のための図書館

『これからの図書館像～地域を支える情報拠点を目指して～』

2. これからの図書館サービスに求められる新たな視点

(3) 課題解決支援機能の充実

これからの図書館には、住民の読書を支援するだけでなく、地域の課題解決に向けた取組に必要な資料や情報を提供し、住民が日常生活をおくる上での問題解決に必要な資料や情報を提供するなど、地域や住民の課題解決を支援する機能の充実が求められる。課題解決支援には、行政支援、学校教育支援、ビジネス(地場産業)支援、子育て支援等が考えられる。そのほか、医療・健康、福祉、法務等に関する情報や地域資料など、地域の実情に応じた情報提供サービスが必要である。

課題解決支援機能を充実させるためには、利用者が直面する課題や問題を的確に捉え、市販の図書や雑誌だけでなく、地域資料や行政資料等も含め、その

解決に必要な資料や情報を広範囲にわたって調査し、確実に収集することが重要である。サービス面では、基礎的なサービスとして、貸出、リクエストサービスのほか、レファレンスサービスの充実が必要である。課題解決支援において特に重要なのは、資料や情報をそのまま提供するだけでなく、利用者が有効活用できるよう分類、目録、排架、展示等の組織化に配慮し、付加価値を高める工夫をすることである。具体的には、関連資料の案内図やサインの整備、テーマ別資料コーナーや展示コーナーの設置、文献探索・調査案内（パスファインダー）やリンク集の作成などがある。関係機関や団体との連携によって講座や相談会等も開催できる。これらの活動についてホームページを用いて情報発信すると効果的である。

また、図書館が持つこうした機能を広く周知し、地域や住民の課題解決に役立つ機関であることをアピールすることも重要である。受け身で利用者の来館を待っているだけでなく、積極的に情報発信を行う必要がある。これらの課題解決支援を効果的に実施するには、地域の関係機関や団体との連携・協力が不可欠である。

『図書館の設置及び運営上の望ましい基準』

3 図書館サービス

- (一) 貸出サービス等 ー略ー
- (二) 情報サービス ー略ー
- (三) 地域の課題に対応したサービス

市町村立図書館は、利用者及び住民の生活や仕事に関する課題や地域の課題の解決に向けた活動を支援するため、利用者及び住民の要望並びに地域の実情を踏まえ、次に掲げる事項その他のサービスの実施に努めるものとする。

- ア 就職・転職、起業、職業能力開発、日常の仕事等に関する資料及び情報の整備・提供
- イ 子育て、教育、若者の自立支援、健康・医療、福祉、法律・司法手続等に関する資料及び情報の整備・提供
- ウ 地方公共団体の政策決定、行政事務の執行・改善及びこれらに関する理解に必要な資料及び情報の整備・提供

□公共図書館の特性

公共施設として最多利用	いつでも誰でも使える施設
特化しない情報提供機関	特化（専門化）された情報とつなぐ「敷居」の低さ
問題や課題の複合性に対応	関連情報・周辺情報・すき間情報・他分野情報

□情報提供機関の使命を果たしていますか？

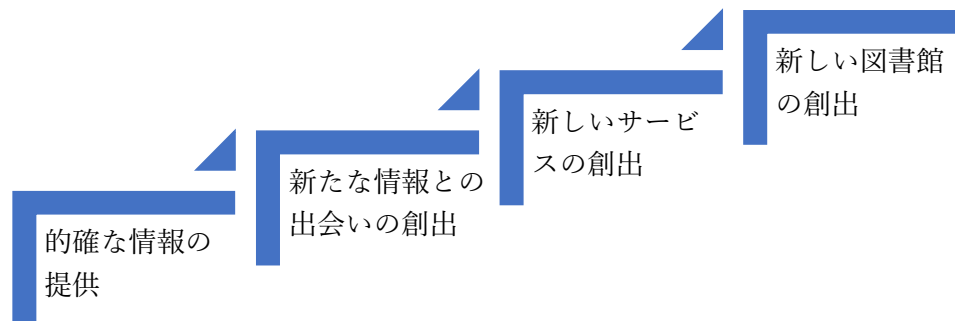
「読書」の変化 1冊通読 ⇒ 複数部分読書へ = 情報収集型読書

仕事や生活に必要な情報を、周辺情報も含めて、
体系的網羅的に提供する情報提供システム ⇒ 図書館

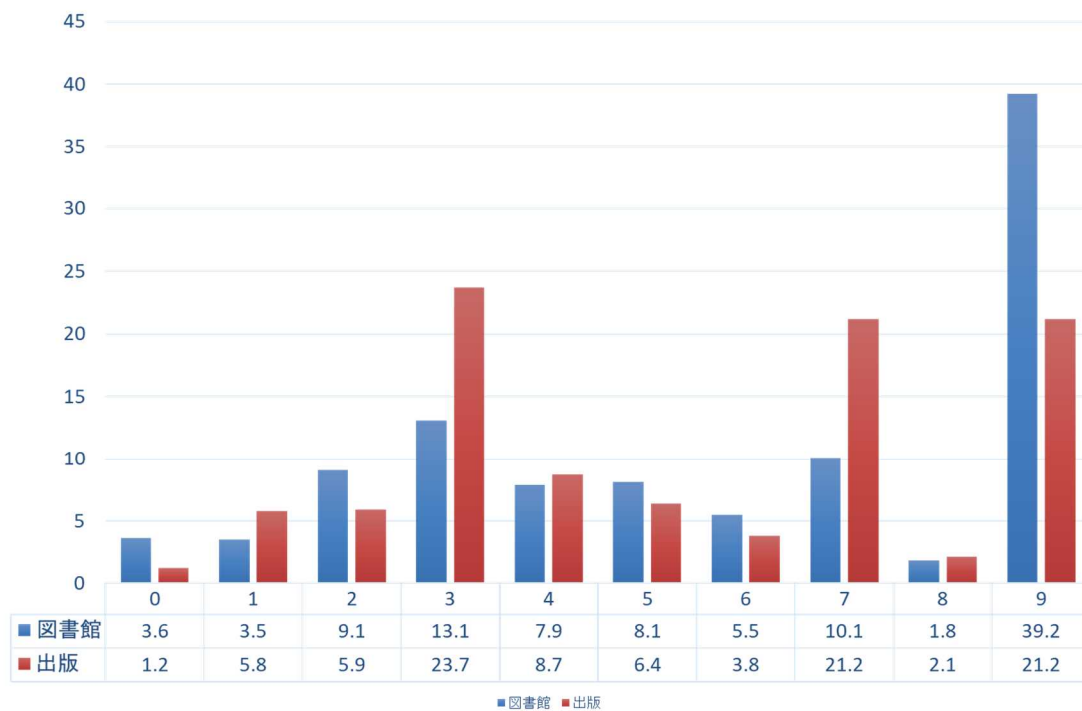
「地方にこそ質の高い図書館が必要」という使命感を！

■役に立つ図書館とは？

□必要とされる図書館を創る



図書館の蔵書と出版の年間比較



□一般書 分類別蔵書割合

分類	2005	蔵書割合	2008	蔵書割合	2011	蔵書割合
0	4,845	3.11	6,401	3.31	10,068	3.75
1	6,188	3.98	8,242	4.27	11,809	4.40
2	16,179	10.40	20,390	10.55	26,501	9.87
3	19,848	12.75	26,524	13.73	39,109	14.57
4	8,813	5.66	11,539	5.97	16,608	6.19
5	11,621	7.47	14,909	7.72	21,595	8.04
6	4,562	2.93	6,319	3.27	9,886	3.68
7	15,286	9.82	18,215	9.43	26,604	9.91
8	2,305	1.48	3,421	1.77	4,618	1.72
9	65,986	42.40	77,249	39.98	101,690	37.88
計	155,633	100.00	193,209	100.00	268,488	100.00

□旧館時の貸出状況（全館）

	2004	2005	2006	2007	2008
一般図書	120,589	131,207	140,049	155,756	193,272
		108.8	106.7	111.2	124.1
児童図書	150,276	161,653	182,926	196,060	211,821
		107.6	113.2	107.2	108.0
雑誌	15,293	16,968	17,981	19,493	24,203
		111.0	106.0	108.4	124.2
A V	10,636	12,341	12,249	12,218	15,993
		116.0	99.3	99.7	130.9
合計	296,794	322,169	353,205	383,527	445,289
		108.5	109.6	108.6	116.1

□世代別利用状況

	0～6	7～12	13～15	16～18	19～22	23～29	30～39	40～49	50～59	60～
2005	4,242	17,533	2,153	1,310	1,388	4,970	15,479	11,531	8,775	9,584
↓	122.4	99.0	155.8	117.9	74.7	119.9	140.1	134.9	125.1	149.5
2008	5,191	17,359	3,354	1,544	1,037	5,960	21,691	15,561	10,978	14,326
↓	163.0	93.3	119.4	201.9	219.1	119.4	115.5	152.1	137.8	167.8
2011	8,459	16,197	4,006	3,118	2,272	7,116	25,044	23,664	15,130	24,044

□図書館外の情報と人をつなぐ

「図書館は知の拠点」？

- ・情報は図書館に集積されていません！
- ・館の内外にある情報を必要とする人へ！

まずは出来るところから + 効果的に

例えば ⇒ 行政との関わり ・ ご近所との関わり

□例えば、行政支援サービス

行政資料（＝地域資料）を永久保存できる唯一の機関

各部署と連携することで、住民にとってより高い行政サービスを実現

＝図書館の存在価値

関係を作る行政職の強み

◇事例紹介

□学校図書館連携

市立図書館と学校図書館の人事を一元化

全校にフルタイム司書を配置

司書・学校司書の人事交流を実施

市立図書館に学校連携係を設置

司書・学校司書の研修増強

市立図書館の本で巡回文庫セット

□ご近所との連携

◇事例紹介

◇さらに図書館の外へ

外（地域）に目を向けてみませんか？

一歩、外に踏み出してみませんか？

「司書が地域に出掛け、地域の実情に詳しくなり、多様な人脈を形成してはじめて、市民の多様な交流活動を支援可能となるのである。米国の司書は地域の各種パーティーの常連だと言われる。人間そのものが情報源であることは言を待たない。」

（常世田 良「今こそ図書館の本質を考える」『Cul De La 3』.2020）

□図書館が、地域の一員となる、まちとともに生きるためには

⇒ 新しい利用者が増えること

それは、今までに無いサービスを提供することと考えています。

□そのために

今までの既成概念からの脱出

地域の多様な機能や分野との連携

⇒ 地域を支え、地域とともにあゆむ図書館

= 地域の一員としての図書館

□つながってみたい所、ありませんか？

教育 ・ 子育て ・ 福祉 ・ 観光 ・ 企業 ・ 地域 ・ 教養 ・ 芸術 ・ 趣味・・・

□「危機感」に向かって私が思うこと

・ 外に一歩も出ないで、どうやって連携したらいいかなどと考えても答えは出ない。
だれも教えてくれない。

・ 相手もわかっていない。でも、一歩踏み出せば、答えは向こうから近づいてくる。

・ そうしなければ、図書館の未来はないという危機感があるかどうかということ。

・ あるなら、できることから一歩を踏み出しましょう。

ご清聴ありがとうございました。

生涯学習館 Ao-na オープンに伴う 図書館サービスについて



横手市教育委員会 図書館課

0

まず初めに横手市立図書館のご紹介

平成17年に8市町村が合併して6図書館（2図書室）
現在も横手市が運営しています。



増田図書館



平鹿図書館



雄物川図書館



旧横手図書館



大森図書館



十文字図書館



生涯学習館Ao-na
横手図書館

有効登録率は令和5年度で約17%
もっと図書館を知ってほしい！

1

1

そんな思いが通じたのか新横手図書館が駅前に！

施 行 者：横手駅東口第二地区市街地再開発組合(民間事業)
区域面積：約 1.7ha
工事期間：令和3年3月～9年1月

- 基本方針：○都市に必要な機能の誘導・整備
○まちなか居住向上のための住環境整備
○集客力の向上
○ひとにやさしいまちづくり



市は事業を「都市計画（市のまちづくり）」に決定
国・県・市が事業に協力することに

2

2

横手駅東口第二地区市街地再開発事業を行う区域（開発前）



（開発後）



横手市が公益施設として
取得し生涯学習館Ao-na
を令和6年9月14日に
オープン

3

3

「横手市生涯学習館 Ao-na（あおな）」概要



【計画概要】

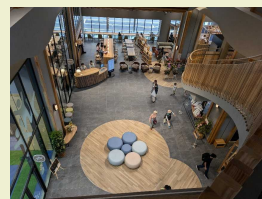
- ▶ コンセプト 「人と人が『つどい、つながる』交流拠点
- ▶ 取 得 費 約15億円
- ▶ 場 所 横手駅東口/旧ユニオンビル跡地
- ▶ スケジュール
 - 令和2年8月 実施設計
 - 令和3年7月 旧ユニオンビル解体工事
 - 令和4年7月 新築工事
 - 令和6年9月 オープン
- ▶ 内 容 1Fラウンジ・カフェ・スタジオ・ティーンズエリア等
3・4F 図書館エリア（横手図書館移転）
収容冊数/約18.7万冊（2F 閉架書庫を含む）
※座席数（施設内全体）約550席
- ▶ 備 考 目標年間利用者数 約30万人

Project process

- 市民アンケート
中高生ワークショップ
利用者聞き取り
市民説明会
- ↓
- コンセプト作成
- ↓
- 基本設計
実施設計 (R2)
- ↓
- 建物解体 (R3)
- ↓
- 運営基本計画 (R4)
施設名称募集 (R4)
新築工事 (R4～6)
横手図書館移転 (R6)
- ↓
- オープン (R6)

4

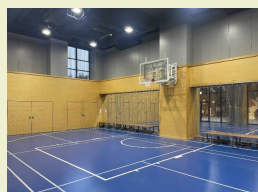
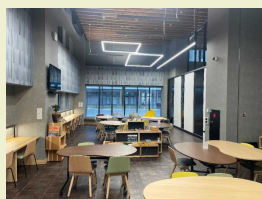
4



5

5

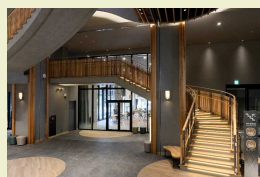
生涯学習館Ao-na 1階 コミュニティスクエア① 9:00~22:00



6

6

生涯学習館Ao-na 1階 コミュニティスクエア② 9:00~22:00



7

7

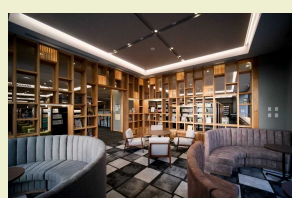
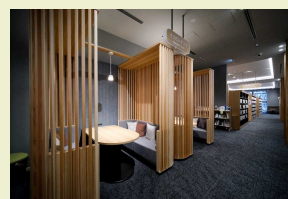
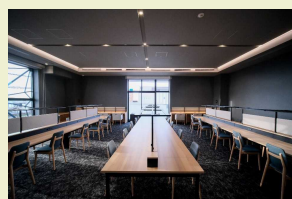
生涯学習館Ao-na 2階 一般図書フロア① 10:00~21:00



8

8

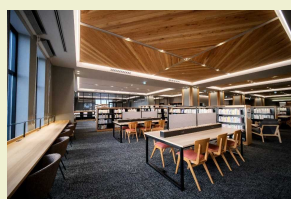
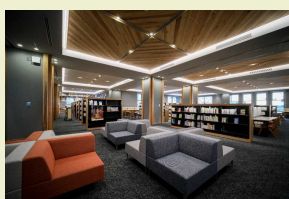
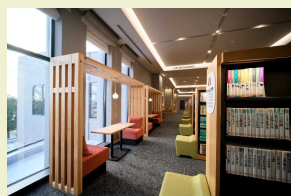
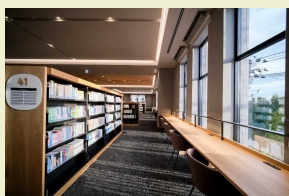
生涯学習館Ao-na 2階 一般図書フロア② 10:00~21:00



9

9

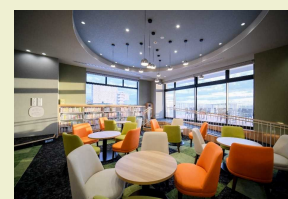
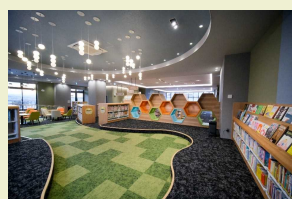
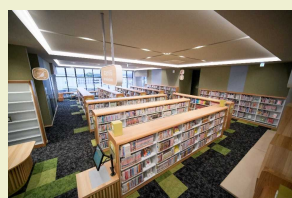
生涯学習館Ao-na 2階 一般図書フロア③ 10:00~21:00



10

10

生涯学習館Ao-na 3階 児童図書フロア① 10:00~19:00



11



12

Ao-naの運営方針等について

昨今の多様化・高度化する地域のニーズに対応するとともに、空洞化の進むまちの中心部にコミュニティ醸成の場として、**図書館もある新しい公益施設を整備する方針**を示した「横手駅東口新公益施設整備概要及び運営方針」を令和5年3月に策定

施設のコンセプト
「～人と人とが『つどい、つながる』交流拠点～」

基本方針

- ① 「自分の居場所」を感じられる場
- ② 生涯に渡る市民の「学び」、「成長」を支援する場
- ③ 子供達自らが、自分らしい生き方の「発見」ができる場
- ④ 地域の魅力が「再発見」できる場
- ⑤ 地域の農工商分野との連携によりイノベーションが生まれる場

横手市の文化・産業・歴史についての展示を強化して、**市民のシビックプライド醸成**に努める

13

13

Ao-naの運営体制について

※私たちは**図書館Ver3.0**と言ったりします。

図書館 1.0
・図書蔵書
・一般貸出、閉架蔵書の閲覧、情報提供、展示
・セルフサービス
・図書サービス

図書館 2.0
・読者のニーズに応じたサービス
・生涯学習施設としての機能
・読者のニーズに応じたサービス
・読者のニーズに応じたサービス
・読者のニーズに応じたサービス

図書館 3.0
・読者のニーズに応じたサービス
・読者のニーズに応じたサービス
・読者のニーズに応じたサービス
・読者のニーズに応じたサービス
・読者のニーズに応じたサービス

図書館2.0
生涯学習施設が図書館と複合化し、同じ建物内。それぞれの機能は線引きされた状態

図書館3.0
生涯学習機能と図書館機能が融合したサービスや運営。

●横手市生涯学習館 Ao-naの運営組織

1階：生涯学習スペース（生涯学習課）
2～3階：図書フロア（図書館課）

※1階にも自動貸出機を設置し図書サービスを
※各課マニュアルを出し合って情報共有して対応
※事務局も一緒になって連携を超えた体制

14

14

図書館3.0による事例

小説家・諸田玲子氏講演会

(イベント)

- ・小説家や絵本作家による講演会
- ・Ao-naイベントでの本展示
- ・正月あまえプレゼント

ボードゲーム交流会

新春甘酒ふるまい

(施設管理)

- ・各階、無線を活用して迅速に対応
- ・1階での本の貸し出し
- ・2階でのiPadの貸し出し

15

15

令和6年からの新しい図書サービスをどうするか？

- ・ 6 図書館 2 図書室を維持するのか？
- ・ 市外在住の個人への貸出サービスを行うのか？
- ・ 図書館利用カード以外でも借りられるようにしていくか？

↓ ↓ ↓

全国の様々な図書館を視察を実施

**思い切ってすべての図書館資料をICタグ化し
新しい図書館サービスへ**

- ・ 図書館のICタグ化により利用者の利便性向上や管理の効率化などのメリットあり
- ・ 図書ICタグ化を導入する公共図書館が全国的に増えている
- ・ 東北では数少ない電波性能と検出率が高いUHF帯のICタグにて利便性が増
- ・ 利用者自身でセルフ貸出&返却による運用

16

16

ICタグ化によるメリット

- ・ **自動貸出機（全館）、自動返却機（横手図書館のみ）の導入**
職員の手を介さずに処理が可能&利用者のプライバシー保護
- ・ **1度にまとめて10冊の貸出処理が可能**
混雑の緩和や待ち時間の短縮
- ・ **蔵書点検の効率化が図られることで休館日の削減**
市民が利用できる日数が増加&選書やレファレンス対応増
- ・ **盗難防止ゲートの導入（横手図書館のみ）**
貸出未処理図書の持ち出し防止などのセキュリティ対策に効果

17

17

蔵書点検ロボットの実証実験 令和4年3月

ICタグの導入効果を今以上に発揮させるために、図書館で利用するICタグと汎用型のロボットを組み合わせ、新たなサービスの可能性について、民間事業者と横手市が連携し、蔵書点検作業をロボットにより自動で行う実証実験を、横手市立雄物川図書館にて、所蔵する2万点の図書資料を対象に行いました。



ICタグの読み取りテストの結果
ハンディリーダー認識：19,723冊
ロボット認識冊数：19,634冊
検証結果 99.5%

18

18

ただ、実験していてハッとさせられます。

蔵書点検をするロボットだけでいいのか？

子どもに夢と楽しさを伝えたい。



19

19

蔵書点検ロボットあおーニャは凄い



蔵書点検ロボットなのに

- ・お話が出来ます！
- ・記念写真を撮ってくれます！
- ・安全装置搭載
- ・本のある場所まで案内します！



忠犬ハチ公ほど有名ではありませんが、平鹿地域の「忠義な猫」をイメージ

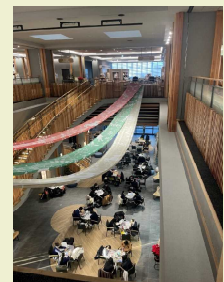


20

20

Ao-naがオープンして予想外だったこと

- ・学生の利用が凄い！
※バスが停まると、
※テスト期間は、
※場所どりの問題
- ・月初日が大変！
- ・新聞雑誌の閲覧が増加！
- ・デッキ利用が人気！
- ・あおーニャ恋愛相談！
- ・人が増えれば問題も増える



色々ありますが、一つ一つ課題に対応しています

21

21

館長として一番意識していること 「図書館を知ってもらうことが一番」

横手市立図書館の有効登録率が約17%

※図書館は利用者へのサービスが充実している

でも約83%の市民は利用していない、図書館を知らない

※図書館は利用者以外への情報発信が課題

新図書館オープンは図書館を知ってもらうチャンス



横手市立図書館X（目標を持った運用）

SNSを立ち上げましたで終わらず目標をもってスタッフみんなで何かをつぶやき。

令和7年度フォロワー目標は350から500超

※Ao-naインスタは1460F、Xは486F

22

22

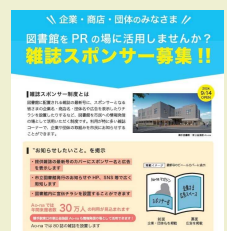
企業にも図書館を知ってもらう 「雑誌スポンサーをとことん売り込み」



新横手図書館オープン前 9件
オープン後 28件

Ao-na各階にあるデジタルサイネージが会社PRの「大きな魅力に！

企業説明会に参加した市内企業にチラシを配布



23

おかげさまで
生涯学習課Ao-naは9月にオープンして

11月12日 10万人達成
2月14日 20万人達成
5月21日 30万人達成

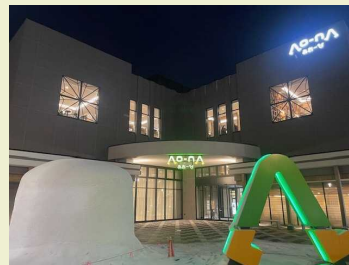
当初、1年間で30万人の入場者を
目標としていたが8か月で達成



横手図書館の状況 ※今年5月まで

利用者数	30,966人（17,670人）
貸出冊数	103,931冊（76,579冊）
新規登録	1,524人（252人）

これまではAo-naのオープン効果で順調な滑り出しとなりました。
図書館Ver3にて事業を進めて利用者に楽しんでいただきたいと思います。



ご清聴ありがとうございました！

第76回北日本図書館大会秋田大会
第49回秋田県図書館大会

2025年6月18日
@にぎわい交流館AU

【事例発表】

図書館で復興・防災を学ぶ

～震災・防災学び合いスペース「I-ルーム」を拠点として～

岩手県立図書館
館長 森本 晋也

岩手県立図書館

1

岩手県立図書館の概要

沿革

1922年（大正11）	開館
1968年（昭和43）	二代目館開館
2006年（平成18）	アイーナ（いわて県民情報センター）に三代目館開館
2011年（平成23）	東日本大震災津波発生
2022年（令和 4）	創立100周年
2023年（令和 5）	「I-ルーム」開設
同	第109回全国図書館大会

蔵書数(R7.3.31現在)

849,938冊
(うち開架冊数 136,304冊)

岩手県立図書館 (アイーナ内1階～4階)

岩手県立図書館

2

東日本大震災津波における岩手県立図書館の取組

2011年

県立図書館の状況

被災地への支援活動

図書館の被災状況

アイーナ内の避難状況

地域写真の仕分け作業
[陸前高田市立図書館]

データ入力作業
[山田町立図書館]

被災図書修復作業
[野田村立図書館]

読み聞かせ支援
[岩泉町・小本保育園]

岩手県立図書館

3

東日本大震災津波から14年余り

- ・震災を知らない世代の増加
- ・震災を経験していない教職員・自治体職員の増加
- ・防災教育・復興教育を教える自信のない学生

震災の記憶の薄れ、災害への備えの意識の醸成の必要性

↓

【岩手ならではの学習機会の提供】

県立図書館における震災津波資料の収集を集中的に行い、復興及び防災・安全等に関して、県民への啓発及び県内外への情報発信に資する拠点を目指します。

「いわて県民計画」第2期アクションプラン（R5年度～R8年度）より

岩手県立図書館

4

震災・防災の学び合いスペース「I-ルーム」を開設

2023年11月3日

資料を活用してグループで探究的に学ぶ

震災関連の連携展示や情報提供

岩手県立図書館

5

震災・防災等の学び合いスペース「I-ルーム」とは

- 児童生徒やグループによる学び合いの場
- 利用者が資料等に出会い、課題解決に向けて有益な情報を得る場
- 夢と希望に満ちた岩手県（Iwate Prefecture）の創造につながる拠点

児童生徒等の復興や防災の探究的な学びの支援

- ・「I-ルーム」で、具体的に学べる図書や資料の提供
- ・「レファレンス」機能を活用して探究的な学びを支援
- ・ワークショップ等の企画・開催
- ・学校や各種団体への図書等のセット貸出

自然災害や防災、安全を総合的に学ぶ拠点

- ・県民や本県を訪れた方々が震災津波や自然災害、防災、安全等を総合的に学ぶことができる場

県内の震災津波関連施設等のサテライト的機能

- ・県内の震災津波関連施設の紹介 ・沿岸部への誘客の促進

「セット貸出」について

- 学校のテーマに合わせて司書が選定した図書や資料を借りる。
- 先生や生徒が必要な図書を選んでまとめて借りる。
- 「I-ルーム」で選んで、借りる。

※復興教育・防災教育以外のテーマも対応可能です。

岩手県立図書館

6

震災関連資料の所蔵状況 2025年4月1日 現在

開架（I-ルーム）

図書・雑誌・視聴覚	点数
東日本大震災	4,001
防災関連資料	1,041
自然災害関連資料	891
合計	5,933

収 集 資 料 点 数

東日本大震災一枚もの資料	6,572
--------------	-------

開架

書 庫 排 架 分	点 数
図書・雑誌・視聴覚	11,962
東日本大震災一枚もの資料	13,039
合計	25,001

総計 37,506点

震災関連資料の収集のチラン

震災の記録を図書館に
震災関連資料をご寄贈ください

岩手県立図書館

7

盛岡市立高校「SDGs」(「総合的な探究の時間」) 2023年10月24日

「調査研究室」や「児童図書研究室」でも調査

「I-ルーム」での学習の様子

「SDGs」をテーマに、各グループごとの「地球温暖化」「フードロス」「貧困問題」「海洋プラスチック」「ジェンダー」「盛岡のものづくりのブランド化」「盛岡の食文化」など多様な課題について、調査学習を実施。

課題に合わせて、関連図書を準備。さらに自分たちで関連図書や資料について調べる。

岩手県立図書館

8

「フェーズフリー入門～いつもの暮らしから、非常時の支えに～」 2023年12月10日

日常の暮らしを豊かにしているものが、非常時の生活や命を支えるという新しい防災、「フェーズフリー」という考え方を学ぶ

例) 町づくり、商品開発、気候変動、教育分野など

【講師】一般社団法人フェーズフリー協会 代表理事 佐藤 唯行 氏

岩手県立図書館

9

岩手県立図書館I-ルーム開設記念講演 2024年3月2日

「地震防災を考える～東日本大震災・能登半島地震をうけて～」

基調講演 岩手大学理工学部 准教授 山本 英和先生

パネルディスカッション「図書館で防災を考える」

パネリスト 岩手大学理工学部准教授 山本 英和先生
盛岡大学文学部准教授 吉植 庄栄先生
岩手県立図書館館長 森本 晋也

岩手県立図書館

10

県立一戸高校「防災ボトルづくりセミナー」 2024年3月3日

令和4年の大雨について調査
高校生の防災意識アンケートを実施
防災意識を高めるため、防災ボトルづくりへ

学校での取組（防災授業、文化祭）

小学生が、地図上に危険なところ、避難場所などを記入していく。高校生がアドバイス。

「総合的な探究の時間」での取組について発表

「防災ボトル」づくり

一戸小学校での出前授業

岩手県立図書館

11

「いわて防災復興研究会」との連携事業

いわて防災復興研究会

東日本大震災津波からの復興を振り返り、今後発生が懸念されている大規模災害等に備えるための提言等を行うため、大学教員や自治体・NPO等の職員など有志でつくった研究会。

●活動拠点:「I-ルーム」
●活動期間:2年間
●内容:講演・研究協議

※広く県民にもオープンにして、対面とオンラインで、これまで7回開催。

研究会（「I-セミナー」）の様子

テーマ(例) R6年度8回開催

「岩手県における東日本大震災津波からの復旧・復興を振り返る」

「大災害から学ぶ危機管理」

「東日本大震災津波の教訓を未来へつなぐ～いわての復興教育」の取組から～」

「震災・津波から学び、未来の命を守る」

「震災とコロナ禍から国と自治体は何を学んだかー地方の視点から震災とコロナ禍を考えるー」

いわて防災復興シンポジウム

岩手県立図書館

12

県立伊保内高校「復興・防災学習」(総合的な探究の時間) 2024年5月10日

(1) 課題設定(事前) 防災をテーマに、生徒が深く調べたいことを考え課題を設定する。

例) 自然災害とハザードマップ、避難と高齢者・障がい者、ボランティア、震災後の伝承、災害後の健康被害など

(2)「情報の収集」(I-ルームでの復興学習)

課題の設定
まとめ・整理
情報の収集
整理・分析

探究的な学びを支援

(3)「整理・分析」「まとめ・表現」

I-ルームに必要な図書や資料を借り、学校でレポートにまとめる。「テーマ設定の理由」、「分かったこと」、「地域の発展に活用できること」、「参考文献」など。

テーマにあった本をみつけ、必要な情報を抜き出す力、テーマについて深く調べる力、情報をもとに対策を考える力などが身に付いた!!

岩手県立図書館

13

花巻市立湯口中学校「復興学習」(宿泊研修の一環) 2024年5月29日

(1) 館長講話 震災を生き抜いた釜石の子どもの避難行動や地域の災害リスクについて学ぶ

(2) テーマについての調べ学習 「言い伝え」、「災害伝承」、「後継新平の復興への取組」、「語り部の活動」、「復興への歩み」などのテーマについて調べる。

職員が、調べ方のアドバイス、図書資料やDVDなどをセット貸出、学校に戻ってから、学習のまとめ。

(3) 台風・大雨ワークショップ「そのとき、どうする?」

付与情報(気象情報)に対して、地域のハザードマップをみながら、家族の状況を想像し対応を考える。

岩手県立図書館

14

洋野町立大野中学校「防災学習」(震災学習列車の事前・事後学習) 2024年6月10日

(1) I-ルームでの学習 館長講話で、東日本大震災のときの様子を聞く。グループごとに、テーマについて調べ学習を行う。

(2) 震災学習列車での学習

実際に壊れた防潮堤などを見て、震災の話を聞き、被害の大きさを実感する。

(3) 大雨を想定した訓練や台風・大雨ワークショップ(出前講座)

学校にいて、大雨が降った場合にどうするかを確認。その後、地域の人、役場の防災担当者から、どう備えるかをグループごとに考える。

岩手県立図書館

15

県立大槌高校「SIMulation おおつち」(ラーニングジャーニー) 2024年11月18日

(1) 「SIMulation おおつち」とは 大槌高校1年生が教育・福祉、産業振興、震災伝承・防災、地域コミュニティ、環境保全の5つの分野でテーマを設定し、探究的な学習を実施

(2) 町内外での視察・調査 石巻市(大川小学校)、大槌町役場、おしやっち、伝承施設 など

(3) I-ルームでの調査学習・意見交換

●震災伝承を日常的なものにするにはどうしたらいいか?

●地域住民が、避難訓練に参加しないのはなぜ? 高校生は参加している? どんな避難訓練だったら参加する?

(4) 関連図書を使つての調査(学校)

「I-ルーム」が一番印象に残っているのは、ディスカッション。「どんなときに『震災』を思い出しているのか?」学校の学習だけでなく、テレビの特集、家庭内の会話など、普段の生活にちりばめられているかもしれないという視点を学んだ。

岩手県立図書館

16

県外の学校へのオンラインでの対応 2024年12月5日

大分県立佐伯鶴城高校(2年生)

総合的な探究の時間で、防災教育をテーマに、東日本大震災について調べ、地元の中生に防災の授業を実施予定。

岩手県立図書館 I-ルーム

オンライン

大分県の高校 いのちをつなぐ 未来館(釜石市)

○ 東日本大震災のとき、中学生が、どのように避難したのですか?
○ 当時、中学校でどのような防災教育が行われていたのですか?
○ 防災教育で普段から、どのようなことを大切にすればいいですか?

□ 普段からできることに、挨拶があります。挨拶していることによって、避難所でも役立ちました。

岩手県立図書館

17

県民向けの様々な取組(I-セミナー)

海と人と、バイオロギングで実現する海洋生物と人の持続可能な共生社会～

家族で防災について学ぼう in 遠野～災害と妖怪～

岩手県立図書館×海と希望の学校 盛岡分校

岩手県立図書館×遠野市教育委員会

「紙ぶるる」ワークショップ

中学生による復興教育絵本の読み聞かせ

絶対に見つけた!～災害救助犬のキセキ～

岩手県立図書館×いわてワンプロ

岩手県立図書館

18

震災伝承施設や学校等へのセット貸出

震災・防災関連の図書やゲーム等の学習教材をテーマに合わせて貸出しています

震災伝承施設での活用

震災・防災の関連図書コーナーを設置しての活用例



東日本大震災津波伝承館



県立野外活動センター



いのちをつなぐ未来館

学校での活用

「ぼうさいまちがいさがし きけんはっけん」学習教材を活用しての授業



宮古市立千徳小学校



遠野市立遠野中学校

岩手県立図書館

19

震災関連施設や関係機関との連携展示

東日本大震災津波伝承館との連携展示



関連本を展示

関係機関との連携



三陸鉄道40周年パネル展

関係機関との連携



土砂災害防止パネル展



日本赤十字支社岩手県支部

岩手県立図書館

20

成果と課題

成果

- ・セット貸出等、学校での活用の増加
- ・大学・大学院の復興教育の授業等での活用
- ・様々なイベントやワークショップ等を通して、県民の防災意識の醸成に寄与
- ・「I-ルーム」での取組を県内外へ発信（ぼうさいこくたいでの展示発表など）

課題

- ・「I-ルーム」の活用の促進に向けた周知・広報
- ・震災や防災に関するイベントやワークショップへの参加者を増やすための工夫
- ・若い世代に向けたイベントなどの開催
- ・今日的課題に対応した取組

岩手県立図書館

21

ご清聴ありがとうございました

岩手県立図書館

22

名取市図書館・学校図書館 支援センターの取組み

令和7年6月18日(水) 名取市図書館 司書 古瀬さおり

1

宮城県名取市

人口 約7.9万人

面積 約100Km

小中学校 15校(約7,500人)
(小学校10校/中学校4校/義務教育学校1校)



2

名取市図書館



R7年3月
年間来館者数
30万人突破!



3

名取市学校図書館のあゆみ

名取市学校司書研修会

- 1975 (昭和50) 年11月
自主研修会団体「名取市小・中司書補会」を結成し、個人宅で行う。
- 1977 (昭和52) 年度
「名取市小・中司書補会」が教育長名で開催
- 2015 (平成27) 年度～
「名取市学校司書研修会」に改名

学校司書 16人

小学校10校 10人 (正規・再任用)
中学校4校 4人 (会計年度)
義務教育学校1校 2人 (正規・会計年度)
※司書教諭: 校務分掌にて発令



4

学校司書の基本的な業務

- ①貸出・返却・予約
- ②購入・受入
- ③除籍・廃棄
- ④蔵書点検
- ⑤日報・月報・年報の作成
- ⑥図書館だよりの発行
- ⑦展示・掲示
- ⑧督促
- ⑨書架整理・館内清掃
- ⑩レファレンス

※司書教諭等との協働、または指示のもと行う業務

- ①年間活動計画の作成
- ②購入計画の作成
- ③オリエンテーション及び利用案内の作成
- ④授業支援
 - ・調べ学習や読書指導に必要な資料の準備
 - ・読み聞かせやブックトーク 等
- ⑤図書委員会活動の補助

※学校行事への参加
※児童・生徒たちとの
コミュニケーション



5

学校図書館支援センター

2013 (平成25) 年4月

「学校図書館支援センター」を図書館に設置

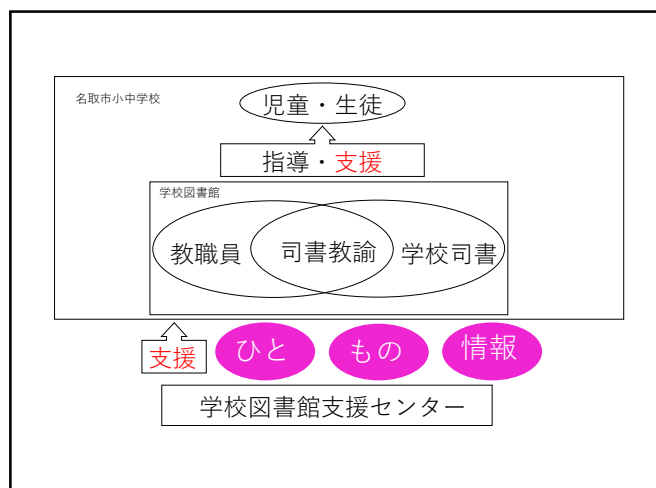
対象

市内小中学校図書館 (15校)

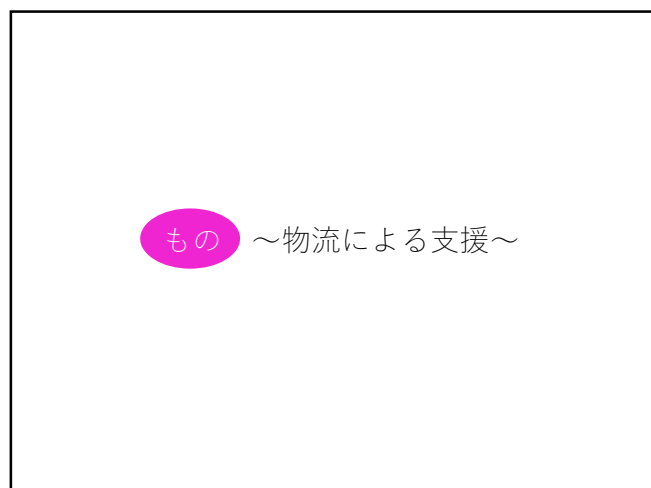
目的

- ・学校図書館を活用した授業支援、読書活動支援
- ・学校図書館の機能強化支援
- ・様々な課題解決のための支援

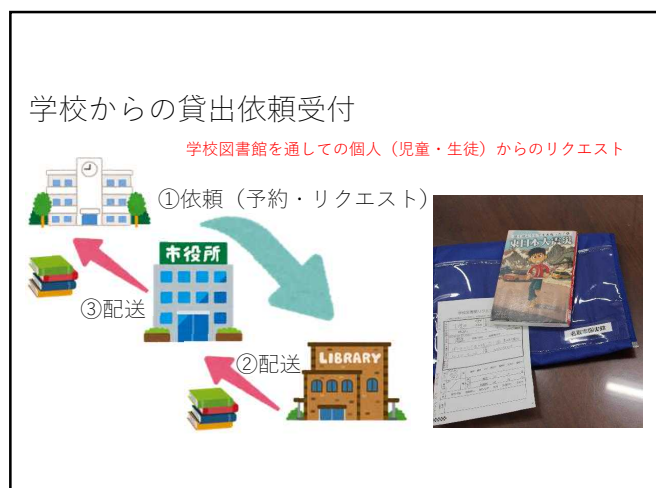
6



7



8



9

学校からのレファレンス（資料相談）

調べ学習用図書、読書指導用図書の貸出

- ・授業で使用する頻度の高い資料は複本として所蔵
- ・教科書所蔵
- ・国語科 教科書掲載本コーナー
（小学生用完成・中学生用作成中）
- ・蔵書点検用バーコードリーダーの貸出

10



11

中学校へ巡回訪問/月1回程度

- ・連絡事項、情報共有
- ・相談業務・・・全体的な研修会では聞けない細かいこと
職場での悩み
- ・実務支援・・・図書館のレイアウト（棚移動などの手伝いも）

12

校外学習の受入れ

市内小学校 全ての2学年（生活科 みんなでつかうまちのしせつ）

主な流れ（60分程度）

- ・ 図書館内の見学
- ・ 質問コーナー
- ・ 読み聞かせ
- ・ 自動貸出機 実演（利用体験）
- ・ 自由見学

図書館のことを知ってもらいよい機会
保育所も受け入れ可能



13

職業体験の受入れ

中学生対象

- ・ カウンター業務
- ・ 配架作業
- ・ 資料の装備作業



他に、大学・高専・高校などのインターンシップも受入

14

情報

による支援

15

学校図書館支援センターだより/年6回

市内小中学校教職員
すべてに配布

- ・ 図書館の案内
- ・ 研修会、行事のお知らせ
- ・ 教育関係資料の紹介
- ・ お役立ち情報

等



16

ブックリスト作成



小学校低学年向け
中学年向け
高学年向け
中学生向け

4 種類

17

中学校司書研修会（月1回程度）

- ・ 名取市図書館の一角を使用
- ・ 館内整理日などに行う
- ・ 移動研修
（見学も兼ねていずれかの
中学校で開催）



18

- ・ 情報交換
- ・ ブックリスト作成
- ・ 資料修理伝講会
- ・ 児童図書・優良図書展示会

…など



19

図書館担当職員研修会/年3回

「小中学校における新聞活用について」
河北新報社 防災・教育室 越中谷 郁子 氏



20

図書館担当職員研修会/年3回

「文学講座 平安文学の世界-光源氏のモデルは誰か? -」
尚絅学院大学 教職課程センター長 松本真奈美 教授



21

図書館担当職員研修会/年3回

「点字に触れてみませんか? 点字についてのおはなしと製作体験」
就労継続支援B型事業所 テラグラッサ 田島 佐織 氏



22

「図書館を使った調べる学習コンクール」 取りまとめ、応募

- ・ 「チャレンジ講座」開催…調べ方の案内、外部講師による特別講座
- ・ 表彰式（教育長から授与）

※今年度で10年目。入賞作品は全国コンクールへ応募



23

イベント等

中学生イラストコンテスト
図書館ポスターコンテスト

・・・など



※その他、各学校独自でイベント開催

24

今後も…

- ・ いつでも人のいる学校図書館
- ・ 子ども達の心の居場所

のために支援を展開



25

ご清聴ありがとう
ございました



26

**令和 7 年度
第 76 回北日本図書館大会秋田大会
第 49 回秋田県図書館大会
記録集**

令和 8 年 1 月 9 日
第 76 回北日本図書館大会秋田大会事務局
(秋田県立図書館内)

〒010-0952 秋田市山王新町 14-31
TEL 018-866-8400 FAX 018-866-6200